

「日本の教会の リバイバルと日曜学校」

福岡教会 横田 法路



収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい。

マタイ9・37〜38

それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として…。
マタイ28・19

今日の教会の危機は、神の国の働き人が少ないということが、最大の要因であると思います。その背後にあるのは、わたしたちの焦点がぶれてきたことにあると思っています。その結果、負の連鎖に陥っているのです。

今、求められるのは、大切なことを大切にすることです。すなわち、イエス様の大宣教命令

の中心である、キリストの弟子を育てることに、もつと力を注ぐことです。キリストの心をもった人を育てるなら、おのずとキリストのように宣教に生きる人になっていきます。

いろいろなことをやることも必要ですが、このことからふれてはいけません。わたしたち一人ひとりがまず、キリストを知り、キリストを愛し、キリストに従うキリストの弟子となりましょう。そして、キリストの弟子を育てることを、意図的に、継続的に、实际的にやってみましょう。一人でも、また教会をあげて。日本の教会のリバイバル（霊的復興）の鍵は、ここにあると信じています。

日曜学校は、この大切な使命を担っています。このビジョンを、教会全体で共有し、支えていくことに取り組んでいきます。今教団で取り組んでいるB・L・E・C（ビーリック、次世代への信仰継承プロジェクト）は、素晴らしい働きです。これにも積極的に協力していきます。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「みことばが語りかける説教 ～教会学校説教への備えのために～」	3
ノア・アブラハム	13
キリストの教えと働き	43
イサク・ヤコブ	79
牧羊ひろば（神の国キリスト教会）	91
カリキュラム	97
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校校部）、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）

みことばが語りかける説教

教会学校説教への備えのために (1)

舞子の丘教会 宮澤清志



教会学校の教師になって、まず不安に感じることは、

説教の作成ということではないでしょうか。牧師に頼まれてCSの働きを始めた人、漠然とCSの教師にあこがれを感じてきたCS上がりの人……。教師になった動機は

人それぞれでしょう。しかし、一旦CSの働きに身を投じた人が、おそらく誰もが通る困難の一つは、説教を語る、ということでしょう。いざ語ろうとすると、どのようにして語ったらよいか分からない、ということは誰にでもある経験でしょう。ある時はあまりの忙しさに説教例をまる暗記し、説教をした、ということや、もっと悲惨な例では牧羊者を説教壇に持って説教した、ということもあるかもしれません。そこで、本稿では、このこと

にスポットライトをあててみたいと考えています。同時にわたしたちの教団には『牧羊者』という教案誌があります。この『牧羊者』を用いていく前提で、ともに説教作成の過程を学んでみたいと思うのです。

特に、この講座で大切にする言葉は「黙想」：メデーション：つまり、聖書のみ言葉を黙想するということです。黙想にはさまざまな仕方があるのですが、特にここで学ぶことは、「説教のための『黙想』」に限りません。私たちが教会学校の教師として、聖書のみ言葉に向きあう姿勢は、徹頭徹尾、この「黙想」によるのです。このことを手掛かりにして論を進めていきます。

植村正久先生がこのように語ったと言われています。

「大人の説教の準備には一回あればいい。しかし、子どもの説教となると一週間の準備がいる」。このことは私も自分の経験の中でそうに感じています。幼子に対する20分の説教と大人への40分の説教…、その準備のため時間は、実は圧倒的に幼子に対する説教の方が長にかかるのです。それは大人が、説教者の語る説教の行間を推測、修正して理解する能力がある半面、幼子には説教者が語られた言葉をそのまま理解することしかできないからでしょう。しかし、このことは同時に幼子を持つ長所でもあります。幼子は、説教者が語った言葉をそのまま理解するのです。

一、はじめに 聖書を読み思い巡らす―み言葉の黙想―

「主の言葉がエレミヤに臨んだ」（エレミヤ1・2）

子どもの礼拝の説教準備の中で、まず何を第一として行うのでしょうか。それは、「聖書を読む」ということです。その聖書のみ言葉を何回も読むことです。何回も何

回も、繰り返し繰り返し、聖書を読むのです。この時、できれば聖書を「声に出して」読むことをお勧めします。聖書は長年にわたって礼拝堂で「朗読」されてきたのです。ですから本来、聖書は思い巡らすと同時に、耳で聴かれることも効果的な書物であると言えます。自らが読んだ神の言葉が自らの耳で聴かれ、それがまた自らの黙想の糧となっていくのです。

ここでの「聖書を読む」という行為において大切なことは、「ひとりの信仰者」として聖書を読むことです。説教を語る者としてみ言葉の前に立つのではなく、ひとりの信仰者として聖書の前に立つのです。ボンヘッファーは、まず説教者意識を捨てて聖書を読むことを求めたそうです。それは大切なことです。「さて、どんな説教を子どもに語ろうか」という思いで聖書に向き合うならば、その意識によってみ言葉が曇らされてしまうことになりかねません。そうではなく、ひとりの信仰者として聖書を読むことが大切なのです。

そしてもう一つ、この時に大切なことは、「受け身」の姿勢で聖書に向き合うということです。何かを読みとろうとするのではなく、あるいは学ぶために、ということ

でもなく、聖書のみ言葉そのものが自分自身に語りかけるのを待ち望む姿勢です。「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」（詩篇119・130）とあるとおりです。徹底的に「受け身」になって聖書を読むのです。言い換えると、聖書を「心で読む」ということです。まず、聖書は「頭で読む」のではなく、「心で読む」のです。

この黙想の段階で求められるものは、徹底した「受け身」の姿勢です。それは自分が語ることをやめることです。語るために、語ることをやめるのです。働くことをやめるのです。

この段階の黙想は、一見静かに見えます。しかし、私たちの心の中では様々な葛藤かつとうが起こります。聖書が神の言葉として迫ってくれば、その言葉と信仰者自身との間に対話が生まれます。時には、それは信仰者自身の内にある疑いであるかもしれません。あるいは不信仰でもあるでしょう。もちろん、それは神の言葉を聴く喜びの時でもあるかもしれません。それらの体験は、私たちを「祈り」へと追い込みます。祈らざるを得なくなるのです。

実は、説教作成の全過程の中で、最も大切なものはこ

の「祈り」の過程です。無私な心で聖書に向き合い、み言葉に聴く中で、心に引かかる個所が、きっと登場します。そのことを大切にしてください。そして、その引かかりをメモしておくのです。すると、知らず知らずのうちにその書き留めておいたメモが生かされることになります。説教作成はそこから始まります。

二、み言葉を学ぶ―神学的黙想―

先程の「み言葉の黙想」をまですっかりと行った上で、次はそのみ言葉を「学ぶ」作業に入ります。しかし、それでもやはり、まず学ぶべきものは「聖書」です。まずは聖書を観察するのです。

聖書を観察する上で、まず聖書の内容（み言葉そのもの）を観察することから始めます。それには、「いつ・どこで・誰が・何を・どのように・どうした」という、いわゆる「帰納法的聖書研究」の視点から調べて読み進めます。特に福音書に関しては、主イエスの言葉や行動、つまりイエス御自身に注目することから始めます。み言葉の黙想をしながら、その中で「あれっ？ これ、どう

いう意味？」と、引っかけた個所を中心に黙想を続けます。その上で、続いて以下の黙想も加えていきます。

①他の訳の聖書を比較する

日本語の聖書だけでも様々な訳の聖書があります。団体が訳したもの、個人が訳したもの、様々な訳の日本語聖書があります。それらを比較することは聖書を学ぶ上で有益です。当該個所の様々な聖書を比較検討してみると、様々な発見があります。また、ひとつの聖書では分からなかった言葉の意味が見えてくることもあります。また、外国語ができる人は、外国語の聖書も併用してみると、より深い黙想の助けにもなります。聖書翻訳の作業は翻訳者の解釈の結晶です。翻訳聖書を読み比べるだけでなく、「み言葉が立ち上がる」経験（み言葉が生き生きと語りかけて来て、その情景の中に居るような経験）をすることは少なくありません。特に、英語が多少できる人には、26種類の英訳聖書を同時に見比べることのできる書物もあります。非常に参考になる書物の一つです。

②当該個所の前後の個所を読む

聖書は、ただ与えられたテキストのみで理解することはできません。その前後に何が書いてあるかも非常に重要な手がかりとなります。与えられたテキストのみにとらわれるのではなく、前後の記事にもよく目を通し、内容を把握する必要があります。

③並行記事にもよく目を通す

特に、福音書の記事には他の福音書にも書かれてある記事があります。その記事にもよく目を通すことです。また、新改訳聖書を用いている方は、各節の脚注に関連聖句の個所が載っています。そこにもよく目を通してみてください。

今述べたことをまとめつつ、同時に私たちが聖書を解釈するにあたって指標となる原則も挙げておきます。

〔平易の原則〕

まず、聖書の当該個所のテキストを通読したら、「自然な」意味を探します。聖書はわかりにくい「謎」ではなく、平易に理解できるメッセージであるからです。それは主ご自身の言葉の中にも見出すことができます。聖書を理解するにあたっては、理解するために無理にこじつけるのではなく、無理のない本来の意味を求めるべきなのです。

〔歴史の原則〕

次に、聖書の原意を求める必要があります。聖書はあらゆる時代の、あらゆる国の、あらゆる人々に向けて書かれたものですが、同時に各部分は、まずその時点においては、特定の時代の特定の国の特定の人々に向けて書かれました。ですから聖書のメッセージは永遠で普遍的であっても、それらは最初に与えられた時代、状況に照らしてはじめて理解できるものです。このような理解は文法的歴史的釈義といわれています。

〔調和の原則〕

そしてもう一つ、わたしたちは聖書全体から見なおして、その個所の意味を理解しなければなりません。キャンベル・モルガンは「前後関係を無視したテキストの扱い方は、独りよがりに過ぎない」と語られたそうです。ですから聖書の最大の注解書は、聖書自身です。そしてバランスのとれた解釈のためには、二つの文脈（前後関係を把握して、その理解の中で聖書を読む必要があります。その二つの文脈とは、①直接的な文脈（その聖書個所のある章、段落など）と、②間接的な文脈（聖書の啓示全体）です。その両方が大切です。

以上、「聖書を通して聖書を学ぶ」という学びをしたただけでも、み言葉が立ち上がる経験ができると思います。しかし、それだけではなく、はじめの黙想で疑問に思ったことに対する答えを見つけるためには、『牧羊者』の「研究資料」も重要な助けになります。実はこの作業において、初めて『牧羊者』が登場するのです。ここまでは聖書のみを用いた作業でしたが、ここからは『牧羊者』をはじめとする「教案誌」を用いていきます。

『牧羊者』の「研究資料」において求められているものは、聖書のみ言葉の味わいや広がりを助ける働きを担うことです。「研究資料」の執筆者は、与えられた聖書のテキストを味わい、いくつもの資料に当たり、解釈の難しい箇所を吟味し、色々の解釈の可能性を提示しています。そして、その箇所が持っている重要なメッセージを提供してくれているのです。もちろんそのような提示は、全体のほんの一部分に過ぎません。全体を限られた誌面で網羅することは不可能だからです。しかし、皆さんがみ言葉を味わう中で疑問に感じた部分、引っかかった事柄のいくつかについては、参考にできるはずです。何よりも、「研究資料」の執筆に当たっては、担当者は様々な注解書に当たり、一つひとつの語句の意味を探り、また語句と語句とのつながりに至るまで念入りに調べ上げて、その上で与えられた「週題」や「年間目標」をも視野に入れて解釈します。そのように書かれている「研究資料」との対話をしていただきたいと考えています。

同時に、皆さんのお手許にある資料にも目を通しておくことも忘れないでください。皆さんの教会、皆さんの本棚にある参考書、注解書にも目を通しておきます。そ

れでも分からない箇所は、教会の牧師先生に聞くことも必要でしょう。そうする中で、黙想から始まったその聖書個所のみ言葉は、段々と開かれていき、その輪郭がだんだんはつきりとし、立ち上がってくるのです。いわゆる「み言葉が開かれてくる」という経験へとつながっていくのです。

三、説教のための黙想

まず手始めに私たちがしたことは、信仰者としての黙想でした。この段階ではひとりの信仰者としての黙想が問われました。それを受けて次の段階では、多少難しい作業がはまりました。いわゆる「聖書の学び」といわれる作業です。この二つの作業を通して、私たちはみ言葉を心と頭とで感じるようになります。しかし、このようなみ言葉を体感しただけではまだ不十分です。続いての作業は、これらの事柄を再び整理し直すことです。この作業は、「説教のための黙想」と呼びます。

この段階では、その聖書個所が真に語りたいことは何か、ということが、漠然と見えてくるようになります。

しかし、実は私たちには、一つではなくいろいろな見え方をしてくるものです。例えば光は、プリズムを通すことによって七つの色にわかれます。皆さんの教会でも、牧師先生は「ポイント」という言葉を用いてその個所の内容を示すこともあるでしょう。しかし、特に教会学校の説教に関しては、一本の中心となるテーマが明確にされる必要があります。

さて、そこで『牧羊者』では「目標」と「暗唱聖句」とがあります。これらの整合性が問題となります。牧羊者における「目標」とは、教会教育室が年間目標やカリキュラムを設定し、その流れの中から設定したものであり、決してむげにすることはできません。しかし、説教者がこれまでしてきたような黙想を通して与えられた、幼子に伝えたいテーマ、こうなつてほしいという目指すものがあるのであれば、それをも十分に考慮すべきであると考えています。

しかしながら、そこには段取りがあります。分級を担当される方々は、当然、『牧羊者』や教案誌によって準備しているはずであり、前の週にはその変更が教会学校教師に対して伝えられていなければなりません。その上

で、自らが説教のための黙想の中から与えられた目標や主題（テーマ）に従うべきであると思います。

いずれにしても、主題、語りたい道筋は一つにしるべきであつて、ポイントが説教の中でいくつもあるというのでは、聞いている子どもたちにはなかなか伝わりにくいものです。もちろん、サブテーマとしていくつかのポイントがあることは構いません。しかし、私たちが、教会学校の生徒から「先生が一番伝えたいメッセージは何ですか？」と聞かれたときには、それを伝えることができなくてはなりません。「いくつかのキーワードを用いて、短い文章で語ること」ができなくてはなりません。それを見いだしたなら、それを一本の太い幹とします。それに適用、例話、証しなどが枝としてつながり、説教の一つの流れになります。

さて、この場合、注意しなくてはならないことは、「中心テーマ」はあくまでも聖書に土台をおき、聖書から取ってくるべきであるということです。例えば書店の本のタイトルのような、いわゆる人生訓的な内容が中心テーマにふさわしいかどうか、よくよく吟味されなければなりません。説教の土台は、あくまで聖書からとられるべき

であって、書店に平積みされている本の題のようなテーマというのは、説教のテーマとしてはなじまないと思うのです。

あと、いくつか重要な点を考えてみましょう。

①手近な黙想書を眺めながら黙想を深めること

自分の思い巡らしを深めるため、他の人が書いた黙想書を読んでみて下さい。「研究資料」のような、字義的な資料ではなく、もう一步、解釈や黙想に踏み込んだものを読んで下さることを奨めます。その一つの例として、『牧羊者』の「聖書講解」はこのための示唆を与えてくれるものです。『牧羊者』の「聖書講解」を読みながら、自らの黙想に更に光を当てて黙想します。そのほかに、皆さんの比較的手近にあり、また教会にもありそうな黙想書としては

- ・旧約（新約）聖書一日一章（榎本保郎著）主婦の友社
- ・旧約（新約）聖書講解（米田豊著）
- ・三分間のグッドニュース（鎌野善三著）

いのちのことは社

等が挙げられるでしょう。また、説教集をお読みになることも有益です。これらの黙想書や説教集との対話を通して、説教のための黙想を更に深めていくことが必要です。

ここで、『牧羊者』を用いている方ならば「説教例」（礼拝メッセージ例）がどう書いているか見ます。もちろんこの段階においては、それを参考にすべきです。しかし、あくまでもそれは一つの「参考」として、です。「説教例」は万能薬としてどこでも用いることができる、ということではありません。一つの例示に過ぎないことを心に留めておいてください。あくまでも対話の一例として眺めてみることをお奨めます。

同時に、これらの資料は、絶対正しいというものではなく、一つの例であることもわきまえておく必要があります。決してこういった書に左右されるのではなく、それらの書物を鵜呑みにしないで、批判的に対話することが必要です。その時に大切なことは、それまでの二つの黙想をいかに念入りにおこなったか、ということです。繰り返しますが、み言葉の黙想はここでも問われます。私事になりますが、筆者がこのような説教準備を行う

中で最も問われているのが、実はこのことなのです。み言葉の黙想を文書にし、様々な注解書や説教集との対話の中で、いつの間にか自らのみ言葉の黙想がかき消されてしまっていることがしばしばあります。ある説教の指導者にこのことを話しますと「それは第一の黙想（み言葉の黙想）が足りないからです」と指摘されました。もったもなことです。一つのみ言葉から説教が生まれてくるためには、すべての土台として「み言葉の黙想」があることを忘れてはなりません。

②同時に聴衆の黙想も深めていくこと

この黙想においても一つ求められることは、聴き手に対する黙想です。子どもたちの現実を見つめつつ、祈り、適用することを考える必要があります。このメッセージを語ったら、子どもはどう聞くだろうか、どうとらえるだろうか、といったイメージを常に持ちつつ、み言葉に耳を傾けるのです。同時に子どもたちの世界の言葉も獲得する必要があります。子どもが身近に感じることができるような世界の言葉で語れるようにするので

す。例えば、祈りにおいて「ご在天ざいてんの父なる御神様おんかみさま、あなたのご宝血ごたけちを感謝します」と祈りをささげても、子どもの頭の中には「？」のマークがいっぱい登場するはずで、大人の堅い表現ではなく、子どもたちの世界の言葉で語れるように黙想することも必要です。しかし、それはただ単に子どもたちの言葉を用いればそれでいいということではありません。教会で用いる言葉には品格が問われます。特に、公の場での言葉には注意すべきです。子どもがわかる言葉を用いつつ、それでいて主のみ前で用いる言葉であるべきなのです。

それからこの段階では子どもたちのための「とりなしの祈り」も欠くべからざる要素となります。子どもたちの家庭的・社会的状況に思いを巡らし、それらが自然ととりなしの祈りへと向かっていくのです。それは説教の言葉にも自然とあらわれます。同時にそれは、主とその言葉への期待となつてあらわれます。

しかし、それらの黙想においては、ただ単に今現在目の前にいる子どもたちだけではなく、その子どもたちを取り巻く世界の現実をも理解することが求められます。目先の子どものみだけではなく、彼らを取り巻く家庭、

社会の現状、学校、その他あらゆる世界の現状を理解する目が必要です。そのことによって、わたしたちの黙想の世界はさらに広がっていきます。

③自らの魂の吟味も忘れずに

説教者は、自分のことを棚に上げて語るものではありません。説教者は、聴衆に語る前にまず自分自身に語るのです。時には密室で悔い改めを迫られます。また時には新しい発見をして主を見上げる経験をします。「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇139・23〜24)とあるとおりです。そのようにして、私たちは主の御手の中で練られ、造り変えられていくのです。しかし、この作業は説教作成過程のどの段階でも起こりえることです。説教を語るということは、まず神が私たちにみ言葉を語って下さる、ということなのです。それをしっかりと心に留めるのです。

おわりに

1111までの黙想の目指すもの

―イメージによる言葉の発見―

黙想は、この先にく説教の言葉の発見の過程です。子どもはイメージで聖書の世界を理解します。しかし、大人はいつの間にかこのイメージを手放してしまうのです。イメージをもつて聖書を読むことを手放してしまっているのです。もしかするとこの「イメージで聖書を読む」ことを良くないことと考える方もおられるかもしれません。しかし、聖書を読む中で求められるものは想像力です。行間を読む力です。幼子のような想像力を大切にしてください。そのためには、私たちが様々な世界に触れることも必要でしょう。(次号に続く)

〔「牧羊者・二〇二二年度Ⅱ巻」より再掲〕

聖書

創世記7・1〜24

タイトル

みんなで入ろう、救いの箱舟

暗唱聖句

あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。

目 標

箱舟なるキリストを信じ、その救いの中に入る者となる。

創世記7・1

導入

(後藤 真)

みなさんは、船に乗ったことがありますか。お客さんと自動車を乗せる大型フェリーは、お風呂もレストランもあって、とても楽しいですよ。聖書の時代にも、そんな今の大型フェリーと同じくらい、大きな船を作った人がいました。ノアです。

神様の決心

神様は、とてもつらい気持ちでした。

「わたしを信じ、愛し合い、正しく生きてほしいと思って人間を造ったのに、人の心に思うことは悪いことばかりだ。」神様は人間を造ったことを後悔しました。そしてついに、この地上から人を滅ぼしてしまおうと決心しました。

けれども、神様はノアに心を留めました。ノアは神様の

の気持を考えて生活していたからです。それで、ノアに大きな箱舟を作るように命じました。ノアと家族、そして動物たちを救うためでした。とても長い時間かかってノアが箱舟を完成させたとき、神様は言いました。

「あなたと、家族は箱舟にはいりなさい。動物たち、鳥たちも箱舟に入れなさい。」

ノアと動物たちが箱舟に入ったとき、神様が箱舟の戸を閉めました。それから40日。毎日毎日雨が降り続きました。雨はとうとう山の上をこえるまでに増えました。人も、動物も、箱舟に入らなかったものは、だれも生き残ることはありませんでした。

ノアとノアの妻。ノアの三人の息子、セム、ハム、ヤペテ。そして、セム、ハム、ヤペテの、それぞれの妻。合わせて8人と、動物たち、鳥たち。箱舟に入ったものだけが残りました。魚やかえる、エビやイカは箱舟には入りませんでした。水の中で生きられるものは、洪水になってもだいじょうぶだったのでしょうか。

神様の命じられたように

ノアはすべて神様の命じられたとおりにしました。お

7月

5日

礼拝メッセージ例

どろくほど大きな箱舟を作るように言われたときも、そのとおりになりました。海から遠く離れた場所で、箱舟を作っていたノアたちを笑う人たちもいたかもしれません。でもノアは神様の命じられたとおりにしました。

動物たちも神様が命じたとおりに、自分から箱舟に入りました。ノアは苦勞して動物を集めなくてすみしました。たった8人で、毎日毎日動物の世話をするにとっても大変だったでしょう。えさをやるだけでも一日が終わりそうです。でも、ノアは神様が箱舟に入れた動物たちを大切にお世話したに違いありません。

洪水が起ることも、箱舟に入って助かることも、全部神様の思いでした。ノアを洪水から救ってくださったのは神様です。ノアのがんばりで助かったのではありません。ノアはただ、疑わないで、神様に従い、神様の救いを受け取ったのです。

みんなで入ろう、箱舟に

水で地上のものを滅ぼしたことは、神様にとってとてもつらいことでした。それで神様は人が心に思うことはよくないけれど、こんなふうに世界を滅ぼすことはやめよう、と決めました。その決心を守り、二度とわたした

ちを滅ぼさないですむように、神様はイエス様を十字架にかけてくださったのです。神様は、つらく苦しい思いをしても、わたしたちを救おうとしてくださるのです。

神様がこれほどまでにしてくださいださった愛を、むだにしないで、ありがとうございます。わたしたちもノアがしたように、疑わないうで、イエス様の救いの箱舟に入りたと思います。イエス様を信じ、十字架の救いを信じて生きるなら、だれでも救いの箱舟に入ることができるのです。

ノアの箱舟には、ノアの家族8人しか乗りませんでしたが、でも、イエス様の救いの箱舟には、人数の制限はありません。100人乗ってもだいじょうぶ！ それぞれが、世界中の人が乗ってもだいじょうぶです。

わたしたちも、みんないっしょに救いの箱舟に入りましょう。「わたしだけコッソリ乗ろう」「あの人にはいじわるされたことがあるから、誘わないでおこう」なんてケチなことは言いっこなしです。家族やお友達がみんなイエス様を信じるように、お祈りしましょう。

♪はこぶねにはいろう♪ (PW43)

聖書 創世記7・1～24 テーマ ノアの箱舟

序論

(石田高保)

ノアの箱舟の出来事は、ノアの家族から人類が再スタートただけに、ひとりの例外もなく関係があります。

一、神の招き

救いは神の招きから始まります。アダムからノアに至る何世紀の間、人類の罪は天に届くほどに積み重なり、神の度重なる悔い改めへの招きも拒み通して、人間の世界は救いたいほどになりました。そこで神は人類を一掃し、もう一度人間を創造し直そうとしました。しかしたった一人だけ神の前に正しく生きていた人が存在しました。そこでノアとその家族だけを救って人類をやり直すことに決めました。

神がまず私たちを救われるべき者として選んで下さいました。最初に私たちのほうから神に救いを求めたわけではありません。救いのイニシアティブ・主導権は神にあります。「神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にし

ようとされたのです」(エペソ1・4、新改訳2017)、つまり私たちは天地万物が創造される前に、すでに神から救われるようにと選ばれていました。今の時代になって神が思いついて私たちを選んだものではありません。私たちが何の貢献もできないこの世の始まりにおいて既に決められていました。私たちは両親を選ぶことはできませんでし、それ以上に神の選びは確かなものです。一度選ばれた人が人生の途中で選びからふり落とされることはありません。もしふり落とされるとするならば、神は後出しじゃんけんをするという方ということになります。信仰によって神の国に入ったのなら、信仰によって天国に入るはずで、神が気の遠くなるような昔に私たちを選んでいたら、選びは永遠に決定的です。私たちがこんにちクリスチャンであるということは、私たちの熱心さによるのではなく、神の選びによります。なぜクリスチャンに選んで下さったのか本当のところは謎です。ただわかることは「神は、知者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選び」とあります(1コリント1・27)。神の国・神と共に生きる世界ではこの世と逆転

現象が起きます。大人よりも子どもが偉いとされる世界です。へりくだった者が偉い人とされるのです。この世の中のシステムをビラミッド型とすれば、神の国は逆ピラミッド型となります。それは最初に神が計画した人間社会だったからです。私たちはそのような世界で生きるようにと神に選ばれました。

彼が神の前に正しいという意味は神から見て完璧であつたとか、罪が全くなかつたということではなく、神と共に歩もうと生きていたことです。当時は聖書はまだなかつたので、神に心を開いている人間は、神から直接語られていたと思われれます。それも人生の分岐点になるような重大な選択に対してだけで、日常的ではなかつた。それは時代をはるかに下るアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフも同様です。しかし私たちは聖書を読めば、神の語りかけをいつでも聞くことができます。

二、神の働きかけ

ノアが箱舟を完成させると神のことがありました。それは家族と共に箱舟に入るようにという命令です。何十年も箱舟の建設に従事していたので、当時の人類はみなそのことを目にしており、ノアのメッセージも聞いて

いたはずですが。それは「私たちと一緒に箱舟に入り、やがて来る大洪水から救われよう」というもの。しかし残念なことにノアの救いのメッセージに耳を傾ける人は誰もいませんでした。神は何十年にわたって人々が神に立ち返るように忍耐していました。今の時代の人々がひとりも滅びることがないようにと忍耐して待っています。

また神はノアに地上のすべての生き物を種類に従って一つがいつ箱舟に入れるようにと命じました。家畜、動物、鳥、昆虫などが箱舟に入ってきました。それは洪水後の世界が生き物で覆われるようになるためです。

結論

神の言葉のあつた7日後、40日にわたって大雨が降り、大洪水となって地上が水で覆われました。地球ぜんぶ海となりました。これによって箱舟に乗っていたノアとその家族8人、あらゆる生き物の一つがい以外はぜんぶ死に絶えました。これはイエス様の救いを拒んだ人々が世の終わりに審判を受けることを暗示しています。しかし神は人間が滅びることを決して願っていません。神はひとりでも多く救われるために私たちを用いようとしているのです。

研究資料

(小平徳行)

箱舟によるノア一家の救いは、イエス・キリストによる救いをあらかじめ示したものである。キリストが再臨について語られたとき、ノアの時代を例にあげて警告を与えられた(マタイ24・37〜39、ルカ17・26〜27)。

テキスト

1 あなたと家族とは ノアの家族も箱舟に入ることが許されたのは、ノアが正しい人であると神に認められたからであった。正しい人 ノアについては「正しく、かつ全き人」と紹介されている(6・9)。「正しい」とは人として神の基準になかったという意味。「全き」とは、完全な、健全な、誠実な、という意味で、神に対して二心なく、誠実に信頼し、従う姿勢を意味する。罪のない完全ではない。

2 清い獣 清い獣と、清くない獣との区別は具体的に明示されていない。清い獣は種の保存のためだけでなく、いけにえのためでもあった(8・20)。七つずつ：二つずつ 新改訳(または新改訳2017)では「七つがい：一つがい」。本文では「七」「二」と数字のみであり、

「七つがい」とも「七匹」とも解釈できる。清いものは、食用や供え物用であったため、多く必要であった。

3 空の鳥 ここでは清いもの、清くないものの区別はされていないが、8・20に「清い鳥」とあることから両者が区別されていたことがわかる。

4 七日の後 神の定めの際の厳粛な宣言であると共に、七日間の猶予でもあった。ここにノアの家族以外にも救われる可能性を与えた神のあわれみ、寛容がある(1ペテロ3・20)。四十日四十夜 文字通りの期間と考えよう。

5 16 ここではノアが神から命じられたようにしたことで、ノアとその家族、動物たちが箱舟に入ったことが繰り返されている。これにより、この場面の重大さと厳粛さを印象付けている。

5 ノアはすべて主が命じられたようにした 箱舟を造る時から、家族とすべての生き物を箱舟に入れるまで、洪水の兆候は見られなかったであろうが、ノアは主に従い、すべてを信仰によって行った(ヘブル11・7)。

9 ノアのもとにきて 動物がノアに連れてこられたのではなく、自発的にノアのもとにきた。かつてアダムのも

とにすべての生き物が連れてこられた時と同様に(2・19)、神の御手がそこに働いていた。

11 ノアの六百歳の二月十七日 洪水の始まりを正確に記そうとしている。このように日付を記すことにより、この洪水が事実であることを強調している。大いなる淵の源 巨大な地下水源と考えられる。この大洪水は豪雨だけでなく、何らかの地の変動により地下より水が噴出したことにもよることを示している。天の窓が開けて先の「大いなる淵の源」とあわせて、「おおぞらの下の水とおおぞらの上の水」(1・7)を連想させる。

13 その同じ日に箱舟にはいった 神はご自身の民の安全が確保されるまではさばかれない(19・22参照)。

16 主は彼のうしろの戸を閉ざされた ノアの背後から戸が閉められた。箱舟の戸を閉ざしたのは主であることを強調している。これはノア家族の救いのための主の保護の御手であると共に、それ以外の者たちに対しては恵みの門戸が閉ざされ、救いの可能性がなくなったことを示す厳肅な瞬間である(マタイ25・10、ルカ13・25)。

20 山々は全くおおわれた 神は人間が逃れる場所を残されなかった。神が備えられた救いを拒むならば、他に

救いの道はない。

23 ぬぐい去られ(ハ)マーハー 地上の生き物はただ死んだのではなく、ぬぐい去られた。これは、「あるものを他のものから取り去る」という意味から、きよめるという意味にもなる。つまり罪を取り除いて地をきよめるとを強調している。6・7、7・4の成就。Iペテロ3・21では洪水の水は「バプテスマを象徴するもの」としている。つまり、洪水によって罪深い世界は葬られ、箱舟はその中に浮かび、ノア一家は救われた。これは古き人がキリストと共に死に、キリストと共に新しいのちに生きる者としてよみがえることを象徴している。

ノアに対して箱舟に入るようにと言われたのは、罪人に対する神の招きの型である。キリストという箱舟はすでに用意されている。洪水の激しさは神のさばきの激しさを示している。しかしそれにも耐えられる箱舟はキリストによる救いの確かさを思わせる。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、パゼット・ウィルクス『創世記講演』、A. B. Simpson, 『The Christ in the Bible Commentary Vol. II』他

聖書

創世記11・1～9

タイトル
暗唱聖句

バベルの塔
これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。

創世記11・9

目標

神に背を向けることの恐ろしさを覚えると共に、その恵みの深さを知る者となる。

導入

(後藤 真)

みなさんは英語を勉強したことがありますか。小学校高学年の人は学校でやっていますね。でもどうして英語があるのでしょうか。英語だけではなくて、なぜ韓国語やフランス語など世界にはたくさんさんの言葉があるのでしょうか。実はたくさんさんの言葉があるわけは、聖書の物語に関係があるのです。今日はそのお話を聞きましょう。

名を上げよう！

ノアが箱舟から出て、世界に人々が増え広がったところ、世界は一つの言葉でした。だから、だれでもおたがいに話すことができたのです。そして住みやすそうな広い場所を見つけた人々は、言いました。

「さあ、れんがを造ってよく焼こう。」

石はそれぞれ大きさが違うので積み上げて建物を作るのは大変です。でもれんがなら、だいたい同じ大きさなので大きな建物を作ることができました。

「さあ、町と塔を建てよう。そうして塔のてっぺんを天にまで届かせよう。そうすればわたしたちの名前は有名になる。そしてわたしたちはバラバラになることもない。」

そうして人々はれんがで大きな建物や高い塔を作りました。そんな高い塔を昔の人が作れたのかなあと思いますが、でも遺跡からは、そのころ作られたと思われる高い塔が出てきています。

このとき人々の心にあったのは、自分の力を見せつけたいという気持ちや、人からほめられたり、偉いと言われたりしたいという気持ちでした。その心の根っこにあったのは、自分たちを神様にし、自分たちがいちばんだと思いう高ぶりでした。でも神様はそれをそのままにはしませんでした。

言葉が通じないように

神様は下って行って人間たちのしていることを見まし

7月

12日 礼拝メッセージ例

た。そして思いました。

「民は一つで、言葉も一つ。そして高い塔を造って天にまで届かせよう」と始めている。彼らはもう何でも自分の思い通りのことをやろうとするだろう。さあ、下って行って彼らの言葉を混乱させ、言葉が通じないようにしよう。」そうして神様は、人々の言葉が通じないようにしました。

こうなるともうお互いに話すことができません。

「そちのれんがを取ってくれよ」

「○△□×!!」(何か外国語を言ってください)

「何言ってるかわからないよ」

と、ついに工事ができなくなってしまいました。人々は言葉がわかる人どうして集まり、世界中に散らばって住むしなくなりました。

このできごとが起こった町の名前がバベルです。バベルという町の名前は「混乱する」という言葉から来ます。神様が言葉を混乱させて、通じないようにしたからです。混乱というのは、ぐちゃぐちゃになってまとまりがつかなくなることです。言葉が通じなくなったのでみんながまとまらなくなったのです。

神様は人間がこんなにひどいことをしても、滅ぼすことはしませんでした。ただ言葉をわからなくさせただけでした。それは洪水のあと、人間を滅ぼさないことを決めたからですそこから悔い改めて神様に従う人になるように願っておられるのです。

心が通じ合うように

バベルの塔のできごととはとても残念なことでした。いま外国語の勉強で苦労している人は「どうして塔なんて建てたんだよ!」という気持ちかもしれませんね。でも、同じ言葉を使っている心も通じるのはとても難しいことです。わたしたちは、なかなか人の気持ちがわからないし、神様の気持ちがわかりません。罪はわたしたちを神様からも人からも遠ざけるのです。

どうしてもわたしたちは自分をいちばんにしようとし、自分を神様にしようとしています。でも、聖霊の助けをいただき、へりくだって神様をいちばんにできるように、お互いに愛し合えるようにお祈りしましょう。

♪ いっしょにうたおう♪ (PW30)

聖書 創世記11・1～9 テーマ バベルの塔

序論

(石田高保)

バベルの塔の出来事は人類が自力で生きるようになった転換点です。

一、違いを認めない世界

現在の世界には、言語が4万以上あると言われていきます。しかし最初からそうだったのではなく、たった一つの言語しかありませんでした。アダムとエバの話していた言葉がバベルの時代まで話され続けてきたのです。ところが一つの言語が分裂するときに来しました。バベルの塔を建てようとした動機は、自分たちの力で神のようになろうとしたことです。これはそもそもアダムとエバが善悪を知る木から取って食べたときの動機と同じです。今まで誰も建てたことのない巨大な塔を建造することによって、自分たちも神のようになると考えたのでしょう。これは自力の宗教の始まりです。良い行いを積み、神から認めてもらえるという考え方は古今東西、人間の心にしみついています。人類が一つにまとまろうと

したことは良いことのように見えますが、罪の影響を受けていなければ良いことです。しかしこのとき人間はすでに罪深い者であり、一握りの権力者が全人類を支配しようとする傾向が生まれていた。全体主義に傾斜していたのです。全体の一致のためには個人の自由が制限され、一部の権力者のために大多数の人々が奴隷状態になることです。しかし教会こそはそれと対極にあり、それぞれの個性が大切にされ、それぞれが神から賜った能力を生かし合い、組織ではなく、家族として機能することのできるコミュニティです。

やがて世の終わりに千年王国が始まりますが、そこではあらゆる言語が消滅し、たった一つの言語だけが話されるようになると考えられます。つまり言葉としてはバベルの塔以前に戻るわけです。現在の世界は外国の人と簡単に話せるわけではありません。しかしクリスチャンどうしにはイエス様という共通言語があります。ほかの教会の人とも、私たちはすぐに親しくなることができます。その人々の中にイエス様がおられるからです。

二、違いを尊ぶ世界

バベルの塔を建設した人々は、天に向かって石を積み

上げ、自力で神に近づけると考えました。これは神の良しとするところではなく、言葉が通じないようしたため全世界に散らされました。おびただしい民族が分かれ出て、言葉が違うということは、考え方が違うようになったということです。バベル事件以来、言葉の違いが進むと、価値観の違いも進み、すべての人が人とは違う思いを持つようになりました。自分の判断基準を正しいとする考え方は私たちの心に根強く残っています。ほかの人の判断基準を受け入れないことにもつながります。それが理由で争うようにもなります。私たちはほかの人との違いを積極的に認めることに慣れていません。いいか悪いかの判断に陥りやすいからです。確かに罪の問題がある場合は、相手に妥協してはいけません。愛をもって真理を語り、相手を戒めなければなりません。しかし多くの場合、善悪の問題というよりは、お互いの価値観の違いであることが少なくありません。どうしても自分が正しくて相手が間違っていると思いたくなるものです。一方的に相手が悪いということは実際はほとんどないと言ってよいでしょう。人間関係は白か黒かではなく、幅広いグレーゾーンがあります。気前よく人のた

めにお金を使う人もいれば、ひたすら儉約に努める人もいます。対立するなら冷静に話し合って妥協点を見つければいいです。安易に迎合したり、回避したり、押し付けたりでは親密な関係は築けません。善悪ではなく価値観の違いではないかと考えてみましょう。

だからといって人ともめないようにひたすら平和を保とうとするのはうわべだけのコミュニケーションで、関係は深まらず、親密になることもありません。親密な関係を築こうとするなら自分の考えていることをしっかりと相手に伝える責任があります。それは自己中心ではありません。相手の意見が無条件に受け入れては不満が残るので健全な解決ではないでしょう。いつばう自分の意見を相手に押し付けることも問題を残します。しかし私たちの人間関係の間にはイエス様がおられ、互いの違いを喜ぶことができるように関わっておられます。

結論

「各自が御霊の現れを賜っているのは、全体の益になるためである」(1コリント12・7)。思いや考えは違っても、自分の中におられるイエス様が相手の中にもおられることを意識しましょう。

研究資料

(辻林和己)

創世記10章は、大洪水以降、ノアの子孫たちが全地に広がった様子を記している。11章の今回の個所では、全地に多くの言語が生まれた経緯が語られる。

テキスト

1 同じ発音、同じ言葉 人の言葉がもともとは一つの起源であることが強調されている。

2 東に 諸説あるが、「アララテの山」(創世記8・4)のある地域から東方へという意味では、との説がある。
シナルの地 メソポタミヤ平原の南部から中部の地域のことだと言われている。肥沃な平地であり、現代につながる文明発祥の地であったと考えられる。

3 れんが、アスファルト メソポタミヤ平原は、石やしっくいに恵まれず、代わりにこれらを用いた。

4 その頂を天に届かせよう 「頂が天に届く塔」(新改訳第3版、同2017)を建てる目的の一つは「名をあげる」(人の威信を示す)ためであった。自分たち自身を誇りたい、自分たちの力で天にまで届くことができる

という過信は、人の心が神から離れていたことを示している。もう一つの目的は「全地のおもてに散るのを免れる」ためであった。この言葉にも、神により頼むのではなく、人間の力を結集して、自分たちの心に思い計ることを実現しようとしている思いが表れている。また全地のおもて(世界中に)散らされることへの怖れの思いも込められている。

6 「民が一つで、みな同じ言葉を使う」ことが、かえって人間の悪行を増大する結果となってしまった。人の心に思い計ることは、大洪水の後も悪いことに傾いていることが示された(創世記8・21参照)。もはや何事もとどめ得ない 神の介入がなければ、誰も人のこの増長と悪事を制することが出来ない段階にまで来ていた。

7 われわれは なぜ神が「われわれ」と言われるのかについては諸説あるが、三位一体の神を暗示している言葉と受け取ることが出来る(創世記1・26等参照)。下って行って 神が人間の心に働きかけられ、その行いに介入されることを示している。言葉を乱し 動詞「乱す」の原形は原語では[ハ]バーラル。新改訳第3版、同2017では「混乱させ」と訳されている。神の人への働きか

けにより、一つだった言葉が混乱し、言葉と心が互いに通じ合わなくなってしまった。

8 全地のおもてに散らされた 5節で、彼らは「散るのを免れる」ために「町と塔を建てた」が、互いに言葉が通じず、散らされてしまった。**町を建てるのをやめた**すでに散らされてしまったので、もう町も塔も建てる意味がなくなってしまった。

9 その町の名はバベル これはニムロデ王国の町の一つバベル(創世記10・10)のことであるという説がある。**全地の言葉を乱されたからである** 「乱した」は7節の動詞と同じ(ハ)バーラル。この言葉と地名の「バベル」(ハ)バーベル)との語呂合わせ。後に出てくる「バビロン」という国の名前は、この「バベル」に由来すると考えられている。

聖書では「バビロン」は不信仰な社会や町、都市であり、またそれを象徴する場所を示す言葉として用いられている。バビロン捕囚後、バビロン州でユダヤ人は迫害を受けた(ダニエル3章)。バビロンは、快楽、罪、迷信に支配される場所であった(イザヤ47章)。黙示録17章、18章にはバビロンに対する裁きと滅亡が記されている。

町と塔を建て、自分たちの名を上げようとした人間に神が干渉され、それを止められた。全地のおもて(世界中)に散らされた人たちの中で、セムの血統から後にアブラムが誕生する(創世記11・10～32)。神はアブラハムの子孫(キリスト)を通して、人類を祝福される(創世記12・1～3、ガラテヤ3・14、3・16)。

創世記11章に記されるこの「バベルの塔」の出来事以来、人類がもたらした混乱に、回復はなされるのか。D・ギドナーは、その回復の約束をゼパニヤ3・9に見る。「清きくちびるを与え」の「くちびる」と今回の聖書個所の「言葉」は原語では同じ(ハ)サーファー)。バベルの塔の当時の人々は「(自分たちの)名をあげよう」とした。後に、使う言語は違っていても世界中の人が「主の名を呼び」、「心を一つにして主に仕える」日が到来する。これを実現されるのは主ご自身であり、それはペンテコステの日から始まった(使徒2・1～4)。

参考図書 D・ギドナー『創世記』『ティンデル聖書注解』(いのちのことば社)、舟喜 信『創世記』『新聖書注解・旧約1』(いのちのことば社) 他

聖書

創世記12・1～9

タイトル

さあ、出発だ！

暗唱聖句

あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。

創世記12・1

目標

罪から離別し、神の導きに従って生きる者となる。

導入

(後藤 真)

結婚したり、会社で働き始めたり、学校に進んだり。みなさんのお兄さんやお姉さんで、家を出て引っ越しした人もいるかもしれませんね、今日のお話は、そんなふうに住み慣れた町から出て、新しい土地に出ていった人、アブラムのお話です。

神様のことば

神様は、アブラムに言いました。

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される。」

神様は、アブラムを選び、アブラムから生まれる子孫を増やし、一つの国にすることに決めたのです。そしてアブラムとその子孫の国を通して、世界の国の人々を祝福する、ということです。これは、神様のことを思わないで悪いことばかり考える人間を、洪水で滅ぼすのではなく、救い、祝福するためでした。そのために神様はアブラムに新しい土地に行くように命じたのです。

アブラムの心配

みなさんがアブラムだったらどうですか？

「ハイ、分かりました。いますぐ出発します」

と言えますか。そんなに簡単には言えないような気がします。まず、アブラムは75才でした。新しい土地に行くって新しい生活をするには、もう少し若いときの方が良いように思います。引っ越しだってとても大変です。だいたいアブラムが住んでいたハランは、大きな川があり、作物もたくさんとれ、とても豊かな土地でした。神様が行くようにというカナンが、住みやすい土地かどうか分

かりません。

それに、カナンの土地には、もともとそこに住んでいる人がいます。アブラムたちが行って、「ここに住みますよ」と言っても、「オレたちの土地に入って来るな!」と言われるかもしれません。アブラムひとりが行くのならしいかもしれません。でも、家族も召使いも、家畜もみんな行くのですから、とても広い土地がいるのです。

また、アブラムには子どもがなく、子孫が増えるようには思えませんでした。長い間ハランに住んでいたアブラムは、お父さんのテラが、本当の神様ではなく、月の神様を拜んでいることも知っていました。そんな自分、神様が話しかけて、こんな大きなことを約束するなんて、とても信じられないことだったでしょう。

主が言われたように

それでもアブラムは、神様が言われたように、出発しました。妻のサライ、おいのロト、すべての財産、家畜、召使いたち。すべて持って、住み慣れたハランを出発したのです。それは「もうハランには戻らないぞ」という決心のあらわれでした。アブラムの心配がなくなったわけではなかったでしょう。でも、アブラムの心には、た

だ神様を信じる気持ちがありました。神様なら、こんなびつくりするような約束をその通りにする力がある。神様は、かならずいちばん良くしてください。だから、神様についていこう。そう思ったのではないのでしょうか。

「アブラムは特別に立派な人だから神様についていたのだ。ばくには無理だ」と思う人がいるでしょうか。そんなことはありません。アブラムは、大きな失敗をしたり、神様を疑ったりしてしまいます。でも、神様は、そんな欠点があるアブラムを導き、訓練して成長させます。そしてアブラムは「アブラハム」と名前が変えられ、「信仰の父」とまで、呼ばれるようになるのです。

わたしたちも、神様についてゆくことができます。自分の思い通りにしたい気持ちや、礼拝よりも遊びに行く方が楽しいなあという思いがあるかもしれません。それでも、神様について行きましょう。神様はわたしたちを通して、神様の祝福をまわりの人に分けたいと願っておられるのです。そしてそれができるようにわたしたちを成長させてくださるのです。

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81)

聖書 創世記12・1～9 テーマ アブラハムの旅立ち

序論

(小泉 創)

誰かと会うことで、私たちは何かしら変化するのだと聞いたことがあります。確かに嬉しい出会いも、そうでない出会いも、私たちに何かを生じさせます。

ましてや神様との出会いは、私たちに大きな変化をもたらせます。信仰の父と呼ばれるアブラハム(アブラム)の人生も、神様と出会って大きく変えられていきました。

一、神の命令と約束

アブラムは父テラとともにカルデヤのウルを出しましたが、カナン之地への途中、一家はハランにとどまりました。ウルもハランもメソポタミアの偶像礼拝が行われる地であって、父テラも偶像礼拝に関わる一人でした(ヨシユア24・2)。ハランで、神様はアブラムに声をかけられました。それは父の家を離れてわたしの示す地に行きなさい、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福の基とするとの約束でした。神様はご自分の民を起

こすために、アブラムを選ばれたのです。

当時の75歳は今とは違うかもしれませんが、それにしてもし新しい一步を踏み出すことは容易ではなかったに違いありません。父テラと別れ、慣れ親しんだ地を離れ、多くの人間関係と別れを告げることは、生活の基盤、保障を手放すことに他なりません。それでもアブラムは神に従い、行き先も知らずに出て行きました。

「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」(ヘブル11・8)。

その決断は、何よりも主なる神様に信頼していくことをあらわしていました。神にのみ信頼して、見たことのない道に歩を進めるということは大きな挑戦です。後に信仰の父と言われるアブラムの一步であり、信仰の冒険の始まりです。

神様と共に歩む私たちにも決断が迫られることがあるでしょう。慣れ親しんだ安全、守り、つながりを手放しながら、信頼して間違いない神様と共に一步を踏み出すのです。

二、祝福の基となる

神様は、アブラムを大いなる国民とし、祝福の基とする、とおっしゃいました。それはアブラムの子孫だけが幸せになる、ということではありません。この時のアブラムにとっては、神様のなさうとしておられることを全部理解することは難しかったことでしょう。罪によって神様から離れてしまったこの世界に祝福をもたらせるために立てられ、用いられるのが神の民です。

何よりもこの祝福の基の約束は、イエス・キリストが来られたときに、民族を超えてすべての人々に及ぶことを指し示しています。そして主イエスを通して神の民とされた者たちも、祝福の基とされているのです。

三、神を礼拝する

アブラムがカナンの地についたとき、神様は「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」(7)と約束の言葉を語りかけてくださいました。その実現にはしばらくの時間と戦いが必要となりますが、アブラムはその約束を受けて、主のための祭壇を築き、主の名を呼んで礼拝を捧げました。神様のゆるしと導きによって、カナンの地

にたどりついたアブラムです。世界をお造りになった神様は、行き先を知らずに旅をした先にもおられました。アブラムのその地での生活も神様が支えてくださいます。

神様はわたしたちが遣わされる先のどこにでもおられます。いつでも、どこでも、どんなときでも、神様は私たちとともにおられるのです。ですから私たちはどこでも神様に礼拝をおささげし、それまでの守りと導きを感じ、それから先の道のりも主に期待するのです。

結論

私たちのもとにまで祝福が届けられたことを感謝します。私たちも祝福の基として用いていただきましょう。そしていつも神様の御前にへりくだり、礼拝をおささげしましょう。

研究資料

(小平徳行)

聖書全巻に貫かれている中心的なテーマの一つは「聖別する神」である。バベルの塔以降、再び罪と混乱に陥った人類を神の救いの恵みに導くために、神はアブラムを聖別された。救いの出来事は神の言葉と人間の信仰と従順によって形づくられる。1～3節はアブラムの召命、4～9節は彼の従順について記されている。

テキスト

1 時に主はアブラムに言われた この命令と約束は、使徒7・2～3によると、彼がハランに住む以前のウルに住んでいた時に語られたことになる。しかし4節によればハランで語られたと考えられる。以上からアブラムがすでにウルで与えられていた命令をハランで再び示されたと考えてよい。**あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ** この命令は徹底した分離を要求している。父の家を離れ土地を手放すとは、生活の保障を手放すことを意味しており、信仰のテストであった。**わたしが示す地** カナンの地の方向であることは分かっていたが、アブラムにとって未知の地であった（ヘブル11・8）。

2 アブラムに対する約束は、アブラム（の子孫） が大きな民となること、そして地上のすべての民族がアブラム（の子孫）によって祝福されることである。**大いなる数**だけでなく、神の前の偉大性も意味している。**国民**（ヘゴイ） 領土と民を含む言葉。一般には異邦人の国々を指すが、ここでは特に他民族と比較してイスラエルの国の偉大性を語るために用いたと考えられる。**祝福の基となる** アブラムへの祝福は、彼だけのものではなく、彼を通して多くの人々に及ぶ。

3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し 人々がアブラムをどのように扱うかによって、彼らの定めが決まってしまうような立場にアブラムは置かれることになった。**地のすべてのやからは、あなたによって祝福される** これは後に、キリストを信じるすべての者（異邦人であっても）が義と認められ、この祝福が及ぶことをあらかじめ示したものである（ガラテヤ3・8）。

4 主が言われたように アブラムの単純率直な従順を表現している。故郷、親族から離れ、行き先が不明確な中で従うことは困難なことである。それにもかかわらず従ったのは、やみくもな行為ではなく、最善をなさる神

への信仰によるものであった。アブラムは現在また将来の生活の保障のすべてを主の御手にゆだねたのである。ハラン 「カラン」(使徒7・2)とも言われている。メソポタミヤの都市で商業の中心地。ウル同様、月神を主神とする偶像崇拜の地であった。アブラムの父テラも偶像崇拜を行っていた(ヨシユア24・2)。

5 すべての財産：携えて もはや戻ることはないという決意の表れ。

6 その地を通って アブラムの旅は、まずカナンの地の中部にあるシケムまで入り、さらにベテルとアイの間を通って(8)、南の極限ネゲブまで及ぶ(9)。ヨシユア24・3において、主によってアブラムが「カナンの全地を導き通った」と言われている。カナンの全土がアブラムに与えられることとしるし(13・17参照)。シケム ゲリジム山とエバル山の間の谷間にある要地。所(ヘマールコーム) 本来は単に「場所」を意味するが、文脈によって特別な意味を持ちうる。新共同訳では「聖所」と訳されている。モレ 「占うもの、導くもの」の意。テレピンの木 新改訳、新共同訳では「樅の木」。樹齢数百年〜千年で高さ15メートル位まで成長する。神木と

してカナンの祭儀の中心であったといわれる。アブラムはカナンの宗教の拠点に祭壇を築き、真の神の臨在を示したのである。カナンびとがその地にいた カナンの地は無人の野ではなかった。

7 あなたの子孫に この「子孫」は単数形で、単数の意味にも、複数の意味にも用いられる。これはアブラムの子孫であるユダヤ人を指すが、究極的にはイエス・キリストを指す(ガラテヤ3・16)。「この地を与えます」「わたしが生ずる地」(1)がここであることを示す。カナンびとがすでに住んでいたことは、神の約束を疑わせるものとなり得たが、神はアブラムを励ますために約束を更新し、強調した。祭壇 約束の地において最初に築かれたのは礼拝の場であった。

8 天幕 地上にあつては旅人、寄留者としてテント暮らしをした。この世は安住の地ではない。これは祭壇と共に彼の生涯を象徴するものである。

9 ネゲブ 「南」と訳されているものもある。現在の死海の南西に広がる乾燥した高地。約束の地の南限。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』、小畑進「創世記講録」(以上のちのことば社)、他

聖書

創世記15・1～16

タイトル

神の約束を信じて

アブラムは主を信じた。主はこれを彼の

義と認められた。 創世記15・6

目 標

神の約束を信じて生きる者となる。

導 入

(和田牧子)

先週はアブラムが神様の導きにしたがって、行き先もわからずに旅立ったことを学びましたね。アブラムは「信仰のお父さん」と呼ばれました。「ええっ? アブラムさんって完べき?」いいえ、失敗もありましたし、怖がりだし、ごくごく普通の人でしたよ。でも神様を信じてしたがつたので、神様から豊かな祝福をいただいたのです。彼の人生を見ると、「神様を信じる信仰ってなんてすばらしいのだろう」と気づきます。今日は、アブラムに信仰をお与えくださった神様のおはたらきに注目です。

「恐れるな」と語られた神様

神様はアブラムに「あなたを大いなる国民にする」と約束されました。なのに子どもが与えられないまま、ずいぶん年をとってしまったのです。「あゝあ、神様の約

束はいったいどうなったのかなあ」。アブラムのためいきが聞こえてきそうです。彼の時代には、子どもがいなことは神様から祝福されていない証拠だ……という考え方がありました。もちろん今はそんなことはありませんよ。それでアブラムの心は不安でいっぱいになったと思います。

そんなアブラムに神様は「恐れてはならない。わたしはあなたの盾である」とおっしゃいました。盾とは、つるぎや弓矢などの攻撃から身を守るための道具です。神様がわたしたちの盾となってくださるとは嬉しいですね!

アブラムは心にあつた不安を遠慮なくそのまま神様にお話ししました。「神様、あなたは私に何をくださるのですか? 私は子どもがいなまま死のうとしています。私の家のあと取りは私のしもべがなってしまう」。なんだか神様に文句を言っているみたいですね。でも、私たち人間が神様にお祈りするということは、思いをそのまま神様にお話することなのです。何も遠慮はいらないのです。

主を信じたアブラム

すると神様はアブラムに言われました。「さあ、天を

見上げなさい。空の星を数えられるなら数えなさい。あなたの子孫はあのようになりますよ。「えっ？　なんですって？」ちょっと考えてみてください。アブラムにはまだ一人も子どもがおらず、アブラムも妻のサライもずいぶん年寄りです。なのに、星の数ほど…。つまり数えきれないほどの子孫が与えられるなんて、信じられるのでしょうか。

ところがアブラムはこの時、「主を信じた」のです。神様のお約束の言葉を信じました。「そうか。神様は何もないところから数えきれないほどの星をお造りになった方なんだ。私たち人間が『絶対無理だ』と思うような約束も、主なる神様にはできるんだ！」と心から信じることでできたのです。そして神様はそのアブラムの信仰を見て「義」と認められたのです。義とは「ただし」という意味です。ただ信じただけのことでも神様はそれを喜ばれたのです。

アブラムは一生懸命よい行いをしたり、努力をして信仰を勝ち取ったわけではありませんでした。神様のお約束をばっちり最初から信じられたわけでもなかったのです。恐れたり、迷ったり、文句のようなことを言いなが

ら、信じる人へと変えられました。アブラムを「信仰のお父さん」へと成長させられたのは神様です。信仰も神様からのプレゼントなのです。

私たちも同じです。私たちが神様に選ばれ、守られ、導かれていると心から思えるようになる信仰そのものを、神様が与えてくださっているのです。

信仰はなんてすばらしい

アブラムさんのお話は旧約聖書の時代のことですが、新約の時代に生きている私たちは、神様との新しい約束をいただいています。アブラムを導かれた神様は、さらにひとり子であるイエス様さえも惜しまないで、私たちの罪のために十字架につけてくださいました。そのことによって私たちは永遠の滅びから、永遠のいのちに生きる人へと変えていただいたのです。イエス様の十字架は私のためですと信じ受け入れる、その信仰によって救いに入られるのです。

信仰はなんてすばらしいのでしょうか。信仰があれば強いし、信仰があればそれが生きる力となります。

♪信仰はなんてすばらしい♪ (GS 25)

聖書 創世記15・1～16 テーマ 神による約束

序論

(小泉 創)

この原稿を書いている3月は、新型コロナウイルスへの対応で社会全体がさまざまな影響を受けています。教会の礼拝が中継になったり、家庭礼拝が勧められたりするようになることは、つい一か月前には想像もできませんでした。皆さんがこれを読んでおられる頃は、どのような状況になっているでしょうか。私たちは先の事がわからず、絶えず社会の動きに影響を受けている存在ですが、それはアブラムも同じでした。当時の世界の中ではアブラムも小さな存在に過ぎません。ソドムの町の王も含む戦いが起きた時、おいのロトも巻き込まれ、アブラムは命がけでロトを奪還することになりました。そのあとで、神様はアブラムに語りかけられました。

一、恐れてはならない

諸王との戦いの後、主の言葉がアブラムに臨みました。「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾で

ある。」(1)。アブラムは先だつての戦いの中で神の守りを経験したことでしょう。王たちと戦って大切なロトを取り戻せたのは、よく訓練された忠実な家臣たちの活躍もありましたが、神様の支えと守りなくしてできないことでした。アブラムは祭司メルキゼデクを通して、神様に感謝をささげました(14・20)。アブラムは王たちに報復される危険を感じていたのかもしれませんが。とすれば、あなたの盾となる、という神様の約束にどんなに励まされたことでしょう。

二、数え切れない星のよひに

さらに神様は、アブラムに大きな報いを与えるとの約束をしてくださいました。子どもが与えられなかったアブラムはしもべに家を継がせようと考えていましたから、大きな報いの約束を聞いても意味を見いだせませんでした。しかし神様はしもべではなく、アブラムの子があつぎになるのだとおっしゃいました。人生の晩年を迎えたアブラムに子どもを与えると聞いても、たやすく信じられる話ではありません。しかも神様がアブラムに約束なさったのは、一人の子どもの誕生だけにとどまり

ませんでした。神様はアブラムを外に連れ出し、天を見上げさせました。「星を数えることができるなら、数えてみなさい」。そこに拡がるのは神様がお造りになった数え切れないほどの星。「あなたの子孫はあのようになる」。あまりに途方もない約束です。神様はアブラムの想像を超えたことを始めようとしておられました。そのため、神様はアブラムを連れ出されたのです。

しかしアブラムはこの信じられない約束を与えてくださった神様を真実な方として信じました。そして神様もアブラムを義と認められました。神様とのお互のべき正しい関係にいと認めてくださったのです。これは信仰によって義と認められることのひな形です。何も証拠がなかったとしても、信じ切れないほどの途方もない約束だったとしても、神様がお約束下さったことに信頼するのです。私たちも、聖書に示されているイエス様の死とよみがえりについても、罪のゆるしについても、再臨についても、新天地についても、真実な神様のお約束なので信じるのです。

三、しるし

神様のなさることは大きくて、私たちに見極めることはできません。しるしを求めたアブラムに神は契約の儀式を通して答えられました。いけにえの間を主の臨在が通り、契約の責任は神にあることをお伝えになったのです。夢の中でアブラムに告げられたのは、その子孫がエジプトに逃れ、400年のうち四代目にカナンの地に帰ってくるということでした。そのときに、カナンの地に住むものたちの悪への裁きがなされ、カナンの地はアブラムの子孫であるイスラエルに渡されることになります。壮大なご計画を、神様ご自身がすすめられます。その実現には神様の時があります。

結論

神様が救いのわざをすすめてくださったことを感謝します。私たちも恐れることなく、私たちの理解を超えたことをなされる神様のご真実を信頼しましょう。

研究資料

(小平徳行)

主がアブラムと契約を結ばれた場面である。実質的にはアブラムの召命のとき(12章)から始まっており、こは契約の確認といえる。

テキスト

1 これらの事後 直接的には前章の出来事と見てよい。主の言葉が…臨んだ これは預言者に啓示が与えられるときの典型的な言い回しで、創世記には本章1、4節のみ。実際20・7では預言者と呼ばれている。恐れてはならない この時、アブラムは恐れの中にあつた。その恐れは前章の東方の王たちからの報復に対する恐れと共に、まだ子どもが与えられていない不安も含んでいる。盾 彼の恐れに対し、神が共におられ、盾となつて守られるとの約束。以後、しばしば、神は盾であるとの信仰が告白されている(詩84・11～12、箴言30・5等)。報い ソドムの王からの報いを拒んだアブラムに(14・23)、主からの報いが約束される。その内容は無数の子孫(5)である。英欽定訳聖書等では、「主ご自身が報いである」と訳されている。主は報いてくださるお方であると共

に、報いそのものとなつてくださる。

2 わたしには子がなく…あなたはわたしに何をくださるうとするのですか アブラムは、どんなに報いを受けるといわれても、子どもが与えられなければ無意味であるとの不満、失望を打ち明けた。主の前にありのままの思いを注ぎ出すアブラムに、主は確かな約束をもつて答えられた(4～5節)。

3 わたしの家に生まれたしもべ ハランで守られていた制度では「間接相続人」が認められていた。つまり、子どものいない夫婦はしもべを養子として迎え、養子は養父母に対して孝養を尽くす責任とともに、養父母の財産を継承する権利が与えられていた。

4 あなたの身から出る者が 老年であるアブラムに子どもが与えられるだろうか、という疑問に対する答えであつた。しかしサライによつてということについては、後に信仰の訓練を経なければならなかつた(16章)。

5 天を仰いで… 主はアブラムに信仰を起こさせるために、夜空の星を見せた。神は無から数えきれない星を創造されたお方であり、人間的に不可能と思える約束も、神には可能であることを示した。

6 アブラムは主を信じた 主とそのみ言葉への無条件の信頼。義と認められた 「義」とは神とのあるべき正しい関係にあること。神の約束のことばに對するふさわしい応答は信仰である。使徒パウロは、ここを引用して信仰義認を論証している（ローマ4章）。アブラムの信仰は死人を生かす神を信じる信仰だった（同17節）。キリスト者は、このアブラムの信仰に倣う者である。

7 約束の続き。ここからは焦点が子孫から土地に移る。

8 どうして知ることが出来ますか アブラムはまだ自分の土地を持っていなかったため、約束の確かさを示すしるしを求めた。これは不信仰を示したのではなく、信仰の問いである（士師6・36～40、列王下20・8～11参照）。逆に、しるしを求めないことによって不信仰が明らかにされることもある（イザヤ7・10～14）。

9～10 この問いに對し、神は契約を結ぶことで応じられた。二つに裂き、裂いたものを互に向かい合わせて置いた この儀式は、特にカルデヤ人の間で用いられた（エレミヤ34・18）。真つ二つに切り裂かれたいけにえの間を通り、契約を破った場合には、これと同じ状態になることの承認を意味した。ここでは主の臨在（炎の出るた

いまつ）だけが間を通った（17）。これは、この契約の責任は神にのみあることを示すためであろう。

11 荒い鳥…追い払った アブラムは備えたいけにえを注意深く見守りながら、神の答えを待ち望んだ。ここにアブラムの信仰の戦いが表現されている。

12 日の入るころ 5～12節の間に昼の時間が経過していた。深い眠り 神による眠りと考えられ（創世記2・21）、神の啓示を受け得る状態。大きな恐ろしい暗やみ13節以下の苦難の時代を象徴している。

13 他の国 エジプトのこと。四百年の間 四百三十年（出エジプト12・40）の概数。

16 アモリびと 本来はカナン人の中の特定の民族名だが、ここではイスラエル定着以前のカナン人の総称。悪がまだ満ちないから 四百年の間を経なければならぬのは、カナン人の罪が関係している。その悪が満ちるまで、イスラエルは待たなければならなかった。つまり、後のイスラエルのカナン征服は、神のさばきのゆえであった（レビ18・24～25、申命記9・4～6参照）。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』（いのちのことば社）、Wenham, G. J. (Word) 他

聖書 創世記18・1～15、21・1～8

タイトル イサクの誕生

暗唱聖句 サラはみごもり、神がアブラハムに告げ

られた時になって、年老いたアブラハム

に男の子を産んだ。 創世記21・2

目標 神の約束は必ず実現すると信じる者になる。

導入 (和田牧子)

みなさんには今、新しくチャレンジしたいなということとがありますか？ それはもしかしたら神様が与えてくださった願いかもしれません。「自分にはそれは無理だよ」と早々にあきらめてはいませんか？ アブラハム、サラ夫婦には信じられないような約束が神様から与えられました。はたしてそれはどうなったのでしょうか。

神様からの約束

ある暑い日のことです。三人の旅人がアブラハムのところに来ていました。彼は旅人たちを迎えようと走っていき、地にひれ伏しました。「主よ。もしよろしければ、私のところをすどおりしないでください。水を持っ

てこさせますから、足を洗い、この木の下で休んでください。また、食べ物を持ってきます。それで元氣をつけて、それから旅をお続けください」。旅人たちは「そのとおりにしてください」と言いました。アブラハムは妻のサラのところに行き、「早く上等の小麦粉をこねて、パン菓子を作りなさい！」と言いました。それから、やわらかくて、おいしそうな子牛を取り、若者に料理をさせました。そうしてアブラハムは旅人たちをもてなしました。旅人たちは元氣を回復し、うれしかったでしょうね。

旅人たちはアブラハムに聞きました。「あなたの妻のサラはどこにいますか？」彼は答えました。「天幕の中にいます」。するとそのうちの一人が言いました。「来年の今ごろ、あなたの妻サラには男の子が生まれています」。アブラハムもサラももう年をとっていました。とても子どもが産めるような年ではありません。旅人の言葉を聞いていたサラは心の中で笑っていました。「年をとってしまった私にどうして子どもを産むことが出来るでしょう？」

この旅人たちは実は神様の言葉を告げるみ使いたちでした。「サラに来年男の子が生まれる」という言葉は神

様からアブラハムとサラに与えられた約束の言葉だったのです。しかしサラはすぐには信じる事が出来なかったのですね。聖書には書いてありますよ。「主にとって不可能なことがあるだろうか?」

イサクの誕生

一年後になりました。神様は約束されたとおり、二人に男の子を与えられました。なんとアブラハムが百歳、サラが九十歳の時です。名前をイサクとつけました。サラは言いました。「神様は私にほんものの笑いをくださいました!」

かつては神様の約束を「それは無理でしょう」とあざ笑ったサラです。しかし神様はそんなサラを見捨てないで、約束どおりかわいい赤ちゃんを与えてくださったのです。神様の大きな愛を感じますね。そして先週のお話にあったように「あなたの子孫は空の星の数のようにになります」という神様のお約束がそのとおりになりました。神様のご計画が一步実現したのですね。

私たちへの神様の約束は?

さて、神様はみなさんそれぞれに、どんな約束を与えてくださっているでしょうか? みなさん一人ひとりに

神様はすばらしいご計画を、ご用意くださっています。神様は神様を信じておしるがいていく者に、一番良い道を用意してくださっています。その約束が実現するとき、「あゝ神様ってほんとに生きておられるんだな」と心から思えます。またそのお約束の実現によって、私たちは心の底から笑うことができます。その喜びは周りにも広がり、神様のすばらしさを沢山の人たちが信じるようになるのですね。

先生(筆者)は中学生の時、聖書を読んで、「聖書ってすばらしいな。おもしろいな」と思いました。そしてこの聖書を小さな子どもにも、お年寄りにもわかりやすくお話できる人になりたいな...とふと思いました。でもそんなの無理だろうなとも思っていました。しかし今、わかりやすいかどうかは自信がありませんが、このように教会学校でお話しできることが嬉しくてたまりません。

結び

毎日いろいろなことがあります。大変な時もあります。でも神様の約束を信じて、楽しみにしながら祈りつつ歩んでいきましょう。

♪主に向かって歌おう♪ (イン 60)

聖書 創世記18・1、15、21・1、8 テーマ イサクの誕生

序論

(小泉 創)

あなたには今、新しく挑戦してみようとしていることがありますか。自分にはそれは無理だからといってあきらめようとしていることがありますか。アブラハム、サラの夫婦に神様がなされたことをみましょう。

一、御使いをもてなす

いよいよ神様がアブラハム、サラの二人と約束していったときが来ます。子どもが与えられるのです。彼らにとっては長い年月でした。この間、約束を信頼して待ちながら、サラの心に疑いの思いがあらわれました。時を待ちきれずにアブラハムとサラのつかえめとの間に、一人の子イシマエルを得ていましたが、それは彼らの焦りと妥協のあらわれでした。

年月が過ぎ、アブラハムもサラも年をとり、人の目から見れば、ますます状況が困難になったと思われる中で、神様はみわざを始めようとしておられました。そして神

様の栄光があらわされるのです。

神様のもとから、三人の御使いがアブラハム、サラのところに来ました。99歳のアブラハムは、彼らが誰であるかを知らないうちから三人のもとに走り寄って歓迎し、サラのもとに走ってパンをつくらせ、牛の群れに走ってよい子牛を選んで料理させました。もてなそうと一生懸命走り回るアブラハムの姿は何とうるわしいことでしょう。

「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使いたちをもてなした。」(ヘブル13・2)。

神を信じる者は、愛する者とされたのです。相手が誰であれ、変わらずに誠実であること、その中に神様を愛する愛があらわされます。

二、サラの笑い

彼らはソドムの町への裁きを伝える前に、アブラハム夫妻に恵みの知らせを伝えるにきたのでした。食事のあとで、御使いは、アブラハムとサラに来年の春、男の子が生まれると告げます。サラは天幕の中にいてそのことを

聞くと、心の中で笑いました。決して喜びの笑いではありません。夫も私も肉体的にも衰えて、もう子どもが与えられる楽しみなどあるはずがないと、あきらめと不信仰がこめられた笑いをしたのです。神様の言葉よりも、現実を見ることを優先したのです。私たちも心が堅くなつて、神様のお約束を素直に受け入れられなくなるこ
とがないでしょうか。

御使いたちはサラの心の中の笑いを知っていました。すべての思いは神様の前で知られているのです。そうと告げられたサラは恐れ、「笑いません」とごまかそうとしましたがそれは嘘です。サラは自分の内にある不信仰をもう一度見つめる必要がありました。いずれにせよ、御使いの告げた言葉は私たちも心にとめる必要がありま
す。「主にとって不可能なことがありますか」(14)。

三、イサクの誕生

一年後、アブラハム百歳、サラ九十歳の時、神様は約束通りに彼らに男の子を与えて下さいました。神様は生まれてくる子どもの名前を、彼らにあらかじめ伝えてお
られました。その名はイサク。「彼は笑う」という意味

です。

一年前に御使いの言葉を聞いたとき、あきらめでいっぱいになって冷たく笑つたサラですが、約束通りに子どもが与えられたとき、神への喜びと感謝にあふれて心の底から笑っていました。そして周囲の人々も共に喜び笑つてくださるでしょうとサラは言いました。神様のなさることは何と素晴らしいことでしょうか。人の不信仰にもかかわらず、神のわざはすすめられていったのです。

十字架における御子の死も、人の不信仰、罪のあらわれでしたが、神はキリストをよみがえらせ、救いのみわざとしてくださいました。誰もが想像し得なかつたことを神様がしてくださつたのです。神様の素晴らしさをほめたたえます。

結論

神様は私たちの上にもいつでも、新しいことを始められます。神様の約束の実現をみて、私たちにも心の底からの笑いが与えられることを信じましょう。

研究資料

(辻林和己)

創世記18章前半は、「三人の人」がアブラハムを訪ね、彼に妻のサラが男の子を産むことを告げる場面である。21章の最初の段落では、その約束通り、男の子が誕生したことが記されている。

テキスト

18・1 テレビンの木 榿の木、あるいは当時のカナン地方に生えていた松科の木という説もある(創世記12・6)。

2 三人の人 1節には「主」とあり、創世記18・33、19・1を読むと、一人は「主」であり、二人は「み使い」であることがわかる。またヘブル語本文では、この聖句の前に「見よ」(ヘヒンネー)という言葉がある。突然の主の顕現への驚きの気持ちが進められている。新改訳2017では「なんと」と訳されている。

4 足を洗って 当時、人を迎えたとき第一になすべきことであった。

5 一口のパンを 丁寧な表現。6～8節を見ると実際

は、豊かな食事であったことが分かる。当時の遊牧民の歓待の仕方でもあったのだろう。

6 麦粉三セヤ 一セヤは、約七・六リットル。

8 凝乳 現在のヨーグルトのようなもの。

9 あなたの妻サラ 三人がすでに妻の名前を知っていることにアブラハムは驚き、彼らがただの人ではなく神的存在であることをますます感じたであろう。

10 帰ってきましょう どのようにかは示されていない。また一年後に同じような方法でアブラハムを訪ねて来られたということも聖書に記されていない。したがって、約束が現実となることによってこのときの主の臨在の出来事を思い起こすことを指しているのかもしれない。

12 サラは心の中で笑って サラのこのときの笑いは、創世記17・17のアブラハムの笑いと同じ、神に対する不信仰な笑いであり、苦笑であった(参考 神学者の北森嘉蔵は著書『聖書百話』の「アブラハムの笑い」という題の文章で、このときのアブラハムの笑いについて考察している)。

13 なぜサラは、笑ったのか 主は人の心の中だけでの笑いさえも知っておられる全知のお方である。サラの

不信仰に対する主の叱責の言葉である。

14 主にとって不可能なことがありますか 主が全能のお方であることの宣言。

15 打ち消して 原語は〔ヘ〕カーハツシュで、「欺く」という意味の言葉。「へつらう」（申命記33・29）とも訳されている。前節の主の権威ある言葉におのき、「わたしは笑いません」と全く自明の嘘をついてしまった。いや、あなたは笑いました 主はサラに対して、再度、すべてを知っておられるご自身を示された。

21・1 顧み（〔ヘ〕パークド）ここでの直訳は「訪れた」。18・10での約束（「帰ってきますましょう」と呼応している）と読むことができる。この節は、わずかに違った表現で同じ内容が繰り返されている。「さきに言われたように」と「告げられたように」。一つの事実を強調するヘブル的な表現。

2 サラはみごもり、… 男の子を産んだ 神の約束の実現について今まで言われて来たことを、一つ一つ確認するかのよう記されている。すべては神がなされたことであることが示されている。

3 男の子の名をイサクと名づけた この名は17・19で

すでに主から示されていた。〔ヘ〕イサクは「彼は笑う」という意味。

4 神が命じられたように この命令は17・12に記されている。イサクに割礼が施されたことは、イサクとその子孫、つまりイスラエルの民が契約の民として聖別されたことを意味する。

6 神はわたしを笑わせてくださった 原文の直訳は「神はわたしに対して笑いを造られた」。この「笑い」は、喜びの笑い、神への感謝の笑いであった。聞く者は皆わたしのことで笑うでしょう 年老いた私に子どもが与えられたことを聞く人々はきつと、私と共に喜んでくれるだろうという思いが込められた言葉。

8 乳離れした日 近東では、今でも三歳あるいはそれ以後の乳離れが一般であるとされる。

イサクの誕生の出来事は、全能の神の選びと計画は不変で、たとえアブラハムやサラの不信仰があったとしても、神は計画されたことを必ず成し遂げられることを示している。

参考図書 7月12日分と同じ。

聖書

マタイ9・1-8

タイトル

罪の赦しの恵み

子よ、しっかりとしなさい。

あなたの罪は

ゆるされたのだ。

マタイ9・2

目 標

あらゆる祝福に先だつて、罪の赦しの恵みを受け取る。

導入

(土屋開夫)

毎日暑い夏休みですが、熱中症やケガからは守られていますか？ もし病院に行かなければならぬくらい大変な時、誰かが連れて行ってくれると助かりますね。

私が関西聖書神学校にいた時、同級生の一人が急にひどいギックリ腰になってしまいました。身動きも出来ない程でしたので、同級生みんなで彼を折りたたみのベッドに乗せ、そしてゆっくり車に乗せ、病院に運びました。その時、まるで今日のお話のお話みたいだなあ、と思いました。今日のお話は、ある病気の人を周りの人たちがイエス様のところに連れて来たお話です。

主のもとに連れて行ってくれる仲間

この人は「中風」と言つて、体が麻痺してしまう病気にかかっていました。人によつて、言葉がしゃべれなくなつたり、手や足が動かなくなつたりします。この人も、寝たきりで動けない程に病気が重かつたようです。

そんなある時、イエス様が町に來られました。イエス様にお会いできれば、きつと癒されるでしょう。でも、自分では会いに行くことが出来ません。けれども幸いなことに、彼にはイエス様の元に連れて行ってくれる家族や友達がいきました。あなたも誰かをイエス様のもとに、そして教会に連れて行つてあげて下さいね。

全てを見通すイエス様の目

さてイエス様は、イエス様のもとに癒しを求めてきた彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪は赦されたのだ」と言われました。

彼らが求めていたのは、この人の体が癒される事です。けれどもイエス様はスゴイですね！ イエス様が人をご覧になる時、その人の表面だけを見るのではなく、その人の心の中や、過去・現在・未来、全てをご覧になるの

です。レントゲン写真よりスゴイですね。

そして、その人が求めているそのものではなく、それ以上のもの、その人に本当に必要なものを与えようとされるのです！ イエス様がこの人をご覧になった時、体の癒しも必要でしたが、それ以上に「罪の赦し」が必要でした。全ての人にとって一番必要なこと、それは罪が赦されて神の子どもとされる事です！

罪を赦すイエス様の権威

するとそれを聞いていた律法学者たちが心の中で言いました、「この人は神を汚^{けが}している」と。イエス様のことを神の御子だと信じていなかったの、「罪を赦すことが出来るのは神だけなのに」と心で文句を言ったのです。その心の声が聞こえたイエス様はこう言われました。「あなたの罪は赦された、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」。皆さんはどう思いますか？ 中風という体の病気を治すことは、もしかしたらスーパードクター（名医）でも出来るかも知れません。でもどんなに医学が進歩しても、人の魂の「死の病」である「罪」を取り除くことは、決して出来ません。それ

が出来るのは、本当の神様だけです。

イエス様は神の御子ですから、人の罪を赦す権威（力）があるのです。けれども、心の中の罪が赦された事は、目には見えません。そこでイエス様は「人の子（イエス様）は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言って、この人の体の病気である中風も癒されたのです。こうすればイエス様の神の御子としての権威（力）が誰にもよく分かります。

まとめ

体の病気も人を苦しめますが、最も人を苦しめ、永遠の死に至らせる恐ろしい病気は「罪」という魂の病気で。ただ一人、神の御子イエス様だけがこの罪を赦し、私たちを神の子どもにして下さる事が出来るのです！

あなたはもう罪を赦してもらいましたか？ あなたの家族や兄弟やお友達はもうどうでしょう？ 本当の超スーパードクターであるイエス様のもとに皆で行きましょう！

♪両手いっぱいいの愛♪

（PW13、ホ146、イン41、新聖歌483）

聖書 マタイ9・1～8 テーマ 罪を赦すお方

序論

(福井文彦)

この個所の出来事は、「中風の人のいやし」と呼ばれています。しかし、ここで真に問題にされていることは、イエスが単に病をいやすことができるだけでなく、罪を赦す権威を持つておられることです。並行記事のマルコ2・1～12、ルカ5・17～26をも合わせ見ながら進めていきます。

一、罪の赦しの宣言

イエスは、カペナウムのある家で教えておられました。そこには大勢の人々が集まり、家の入り口までいっぱいになっていました。そこへ一人の中風の者が、四人に運ばれてやって来ました。ところが、戸口までも大勢の人で、イエスに近づくことができなかったのです。

そこで、家の外側から屋上に上がる階段をのぼり、屋根をはいで大きな穴をあけました。家の中にいた人々に天井から突然ばらばらと土が落ちてきました。すると、中風の者が床のまま吊り降り落ちてきたのです。そこに

は、中風の者が横たわっていて、屋根からのぞいている人たちは哀願するようにイエスを見ました。

するとイエスは〈彼らの信仰を見て、いきなり〈子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ〉と宣言されたのです。〈彼らの信仰〉とありますから、中風の者を運んで来た四人の人たちの信仰も含まれています。しかし、肝心なのは中風の者の信仰です。何よりも彼の信仰を見て、イエスは罪の赦しを宣言されたのです。

二、「冒涇」という批判

ところがイエスが罪の赦しの宣言をされると律法学者たちは、心の中でこうつぶやきました。〈この人は神を汚している〉と。というのは、律法学者たちは罪を赦すことができるのは神だけであると考えていたからです。彼らはイエスが神であることを認めていませんでした。ですから、神以外の者が罪を赦すなどとは、とんでもない罪だと思ったのです。

当時のユダヤ社会では、病気はすべて罪の結果であると信じられていました。そこで病気にかかるのは、他の人よりも罪深いからだと考えていたのです。これは、全く聖書的ではなく(ヨハネ9・1～3参照)、イエスは、

こうした因果応報的な考えを受け入れておられませんでした。

それにしても、どうしてイエスはここで罪の赦しを宣言したのでしょうか。他の病人たちにしたように、ただちに手を差し伸べて彼を立ち上がらせることをどうしてしないのだらうと、人々は思ったことでしょう。

しかし、この個所で最も大切なことは、罪こそが人類にとつての根本問題であり、その解決のためイエスが来られたということなのです。

三、どちらがたやすいか

そこでイエスは「あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」と質問されました。私たち人間の間では、罪が本当に赦されたかどうか、その結果はだれにも見えません。すなわち確かめようがないので、口からの出まかせであっても言うことができます。しかし、中風のいやしは、起きて歩くことによってすぐにわかります。ですから、「起きよ」とは安易に命じることではできないのです。私たち人間にとつてはこちらのほうが難しいのです。

しかし実は、病気をいやすよりも罪を赦すことのほう

が、はるかに難しいのです。というのは、罪の赦しは、ただ神のみによつて与えられることだからです。そして律法学者はそのことを知っていました。そこでイエスは彼らにとつて難しいと思われていた中風のいやしをなさつたのです。

そこでイエスは、〈人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために〉と云つて、ただちに中風の者を立ち上がらせました。立ち上がった彼は、床を自らたたんで家に帰って行きました。律法学者は、イエスの罪を赦す権威に対して言い逆らうことができませんでした。この奇跡によつて、イエスだけが罪を赦す権威を持つておられる唯一のお方であることが示されたのです。

結論

イエスだけが罪を赦す権威を持つておられます。そして中風の者だけでなく、だれもが罪の赦しを必要としています。イエスを信じ近づくと、中風の者のように罪が赦され、起き上がり、喜び勇んで歩む新しい人生が始まるのです。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

ここでの中心主題は、罪のゆるしの權威についてである。病を癒^いすことができるイエスは、すべての病や苦難の根である罪を滅^いぼし去ることがおできになる(病と罪の關係については後述を参照)。罪を滅^いぼし、罪のゆるしを人に与えることこそがイエスの本当の使命であり、それは十字架上で達成されるものであった。十字架なくして罪のゆるしはなく、罪のゆるしなくして本当の癒^いしもない。イエスは罪をゆるす權威を持つ者として、神の国の到来を宣言し、本当の救いへと人を招かれたのである。

テキスト

2 人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んできた マルコやルカでは、四人の者がこの病人を運んできたこと、そして群衆のためにイエスに近寄ることができなかったので、屋根から床ごとつりおろしたことが記されているが(マルコ2章、ルカ5章)、マタイはそれらの記述を省いて、罪のゆるしに焦点を絞っている。彼らの信仰 イエスの癒^いしの力を信じて、なんとしても

みもとに行こうとした彼らの信仰。運んできた者たちだけでなく、病者本人も含まれるであろう。マタイは、詳細を省きつつも、マルコやルカが記したその行動を念頭に置いていたと考えて良いだろう。子よ [ギ]テクノン^{まんえん}は「(わたしの)子よ」という親しみを込めた呼びかけで、そこにはイエスの愛とあわれみが込められている。あなたの罪はゆるされたのだ 当時のユダヤ社会では、病は罪の結果であるという考えが蔓延^{まんえん}していたが(ヨハネ9・2参照)、因果応報の考えは全く聖書的でない(もちろん品行や不摂生の結果として病気になるといった因果關係は当然あり得る)。義人が病で苦しむこともあるし、逆に悪人が健康で長生きすることもある。それでは病と罪は何の關係もないかと言うと、そうではない。むしろ、すべての病と苦難の起源は、死そのものと同様に、罪がこの世に入ったときにさかのぼると言える。その意味に限れば、すべての病や苦難は罪の結果なのである。この個所の中心点は、罪こそが人類にとつての最も根本的な問題だということ、そしてその解決のためにこそイエスは来られたのだと言うことである。イエスは、十字架と復活を通して、罪の一症状に過

ぎない病や苦難にだけではなく、その根本である罪そのものに対して決定的・致命的な一撃を加えたのである。

3 神を汚している 律法学者たちは罪をゆるすことができるのは神だけと考えていた。洗神罪は基本的には神の名の乱用に適用されたが、その延長として、神になりすます、あるいは神にしかできないことをすることも冒涇と見なされた。彼らは、それまでの数々の出来事からイエスの神的權威に気つくべきであったが、形式主義に陥っていたゆえ、靈的な感性が鈍っていたのである。

4 なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか 神の名と主権を守ろうというのは建前であって、律法学者たちの動機は、ご自身に対して抱いているねたみなどの悪意であることをイエスは見抜いていた。

5 どちらがたやすいか 人間的な視点から見ると、結果が即座にあらわれ、効果がなければそれがすぐに露呈する病の癒しよりも、いかようにも言い逃れのできる罪のゆるしの宣言の方がたやすく思える。しかし本当の意味で難しいのは、言うまでもなく罪のゆるしである。**6-7** 人の子は地上で罪をゆるす權威をもっていることが、あなたがたにわかるために、ここにこのみわざの

目的がはっきりと示される。人の子（ダニエル7・13（14参照））であるイエスが罪をゆるす權威を持っていることを人々に知らせることである。目に見えない罪のゆるしがそこでなされたことの証拠として、目に見える癒しのわざが行われたのである。**地上で** は「終末の到来に先がけて」の意。イエスによって神の国は既にもたらされ、信じる者はその前味を享受することができる。人の子として来られ、終末の祝福をこの世界にもたらしたイエスは、その使命のために、罪のゆるしの權威を持つておられるのである。その權威によってイエスは、**起きよ、床を取りあげて家に帰れ** と命じた。すると彼は起きあがり、家に帰って行った この反応は、イエスの命令に即座に、そして正確に応答するものであった。

8 恐れ 畏怖の念は神的な顕現に対してなされる反応（17・6、28・5）。**こんな大きな權威を人にお与えになった神をあがめた** 群衆は、イエスの神性を認めるには至らないが、彼に与えられた神的權威を認め、それを与えた神をあがめたのである。

参考図書 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ10・1-16

タイトル

弟子たちの派遣

暗唱聖句

わたしがあなたがたをつかわすのは、羊

をおおかみの中に送るようなものである。

マタイ10・16

目標

主に遣わされた者として生きる者となる。

導入

(土屋開夫)

聖書の中には、色んな数字が出てきます。「3」とか「4」とか「7」とか。その意味を考えてみると、聖書が更に面白くなってきましたよ。

今日、聖書に出てくる数字は「12」です。「12」と言えば何を思い出しますか？ そう、時計の針は12時間で一周しますね。それと一年も12か月。つまり地球が太陽の周りを一周するのに12か月かかります。

他には何かありますか？ そう、イエス様のお弟子さんが12人です。聖書で「12」は「選ばれた人」を意味するとも言われます。

弟子とは？

イエス様は12人の弟子を選びました。(他にも弟子がたくさんいましたが、野球選手のように弟子にも一軍と二軍がいるのです。12弟子は一軍選手でしょう。)

12弟子の名前はペテロ(シモン)、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ(ナタナエル)、トマス、マタイ(レビ)、ヤコブ、タダイ、シモン、ユダです。

ところで「弟子」って何でしょう？ 辞書には「師匠(先生)に従う人、教えを受ける人」と書いてあります。

イエス様の弟子たちも、イエス様に従い、教えを受けるために選ばれたのです。そして受けた教えを伝え広める役目が弟子にはあります(福音が世界一周するため)。

弟子たちは、まだまだ一級ではありません。まだ十級ぐらいかも知れません。それでもイエス様は12弟子を町の人々の所に遣わされました。そして、

①「天国が近づいた」という神様からの良い知らせ(福音)を伝えよ、と言われました。(宣教)

②病氣の人を癒し、悪霊を追い出せ、と言われました。(癒し)

③家に入って、平安を祈ってあげなさい、と言われました

た。(祈り)

全てを見通すイエス様の目

このように、弟子たちはとても大切な役目をイエス様から与えられて、人々の所に遣わされました。

でも考えてみると、とても勇気が要りますね。出かけて行って、初めて会う人たちに、イエス様の事やイエス様から聞いた言葉を伝えたりするのです。勿論、弟子たちの事を歓迎して、話をよく聞いてくれる人たちもいたでしょう。けれども、歓迎してくれる人ばかりではありません。「誰だ、あんた達？ イエスの弟子？ うちには用はないね。出てけっ」と言われる事もあるでしょう。それにイエス様の邪魔をする悪魔の妨害もあります。イエス様は「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである」と言われました。弟子たちは弱い羊のようです。

けれども大丈夫です！ なぜでしょう？ そう、羊飼であるイエス様が、目に見えなくても一緒にいてくださるからです！ 弟子たちは一人ではないのです。

キミも弟子になりますか？

イエス様の弟子は、この時の12弟子だけではなくありませ

んよ。イエス様の言葉を聞いて、イエス様に従おうとするなら、キミもイエス様の弟子になれるのです！ 子どもでもイエス様の弟子になりますよ。

ただし、「ボーンと生きて」いたらイエス様の弟子にはなれません。今の時代は本当に悪い時代です。オオカミのような悪魔が、私たち人間を「本当の神様から引き離そう。罪と欲の道に引きずりこもう。地獄の道連れにしよう」と狙っているからです。だから心の目、信仰の目が「シャキーン！」としていなければならぬのです。

まとめ

でも大丈夫です！ 12弟子だって最初から立派なお弟子だった訳ではありません。失敗ばかり、怒られてばかりでした。でも後になったら、みんな立派にそれぞれの役目を果たす人に成長しました。

大丈夫！ キミもイエス様の弟子になりますよ。だってイエス様がいつも一緒にいて、一つ一つ教えてくださるんですから。

♪12でしのなまえ♪ (ふ13)

聖書 マタイ10・1～16 テーマ 弟子たちの派遣

序論

(宮澤清志)

イエスは十二弟子を選びになり、派遣されました。派遣にあつての言葉は、今も私たち一人一人に与えられているものです。

一、主の選び

イエスが十二人を選ばれたのは、旧約時代のイスラエル十二部族に代えて、新しい神の国である教会を建てるためでした。一人一人が選ばれた基準は、人間的なものではなく、ただイエスが望まれたということだけです。

選ばれた十二人の特徴は、本当にばらばらです。頑固者や気性の激しい者、人を導くのが得意な人、物静かな人に、思ったことをすぐ口に出す人、ローマの手先の取税人、逆にローマに反発する熱心党、さらには、最後に主を敵に売り渡してしまう者まで選ばれていました。

しかし、一定の基準がないところが、後の教会にとって、大切なことでした。イエスが一人一人をかけがえ

のない存在と評価し、弟子として受け入れ、教え導き、また用いようとしてくださっていることをただ感謝して受け入れることが大事です。

また、自分には選ばれる資格がない、だめな人間だと思っているのに、今救われているとすれば、それは主が選ばれたのだから、何も心配する必要はないということです。イエスを中心とした交わりの中で互いを受け入れ、尊ぶ交わりを築いていくときに、小さなことで区別し差別することの多いこの世にあつて、イエスの望んでおられる新しい神の国が実現していくのです。

二、遣わされていく弟子たち

この時イエスは弟子たちに、まずユダヤ人に宣教するように命じられました。これはユダヤ人が、旧約の時代から救い主を待ち望んでいたからです。しかし、十字架と復活の後には、全世界に行つて福音を宣べ伝えなさいとイエスは命じられました。使徒行伝では、聖霊の導きに従つて遣わされ、あるいは、迫害のためにやむなく散らされていったこともありました。

どこに遣わされるにしても、携えてゆくのは福音です。

〈天国が近づいた〉とは、神の救いはあなたに必ず訪れるという希望のメッセージです。天の国の近さは、距離や時間のことでありません。神と私たちの関係における近さです。私たちが悔い改めて神に立ち帰った時から、神の国に入れていただき、神との交わりが与えられます。この救いは、私たちの行いではなく、ただ信仰により、恵みによって与えられるものです。ですからイエスは「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」とおっしゃられました。これが神の国の原則だからです。

また、弟子たちは質素な姿で遣わされていきました。それは、弟子たち自身がまず、思い煩いから解放され、神が必要な物を満たしてくださいという信仰に生きていたからです。そして出会う人々が、この世での富や名譽などの誤った期待を持たず、本当に求めるべきものが何であるかを示すためでもありました。

今も主からの使命と信じて宣教に遣わされる人もあり、家族の転勤などで引越す人もいます。いずれにしても、主が私をここに遣わされていると信じ受け止めるとき、福音宣教の門が開かれていきます。

三、平和の使者として

福音を伝える弟子たちは、訪れた家の平安を祈りました。「シャローム（平安がありますように）」とは、今もイスラエルで日常的に用いられる挨拶ですが、クリスチャンにとっては、単なる挨拶言葉ではなく、すべてを御手に治めておられる主に信頼し、またキリストによって神の前に平和が与えられている喜びに立った言葉です。

イエスは、派遣する弟子たちを受け入れない人がいることも知っておられます。挨拶したりお世話をしようとしても受け入れないばかりか、かえって反発するものもいます。しかし、福音にあずかった喜びをもって、どんな相手にも神の祝福を祈るのです。祈った祈りは決して無駄にならず、その平和はあなたがたに返ってくると約束しておられます。

結論

私たちは恵みによって救われて神の民とされ、改めてそれぞれのところに遣わされています。使命に立つて、主のもとに帰る日まで、主のわざに励みましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈

十二弟子を宣教に派遣する記事である。マルコ6・7
 13、ルカ9・1～6に並行記事があるが、主イエスの
 派遣の言葉についてはマタイがもっとも詳しい。マルコ
 (3・13～19)とルカ(6・12～16)には十二弟子(使徒)
 任命の記事もあるがマタイはそれを載せず、派遣の記事
 では「十二弟子」はすでに「十二使徒」(2)と呼ばれて
 いる。ルカでは他に72人の派遣についても記されており
 (10・1～16)、そこにも共通の内容が見られる。いずれ
 の場合も弟子の派遣は主イエスご自身による巡回宣教に
 続いており、派遣の理由はそこで主がご覧になった民衆
 の霊的、実際の窮状である(マタイでは9・35～38)。そ
 れゆえ、主が弟子たちを派遣された第一の目的は人々に
 仕えさせることであって、彼らの訓練ではない。

テキスト

1 十二弟子 弟子(ギ)マセーテース)は教師の近くにつ
 いて教えを受ける人を指す。2節では同じ集団が「十
 二使徒」と言い換えられている。使徒(ギ)アポストロス)

は動詞「派遣する」(ギ)アポステロー、5節)から派生し
 た名詞で、しばしば派遣者の権威を派遣先で代理する使
 者の意味で用いられる。優れた教師の周りに弟子集団が
 形成されることはよくあるが、主イエスの弟子集団は初
 めから権威を与えて「遣わす」ことを目的に任命されて
 いる点が他の集団とは異なっている(マルコ3・14～15)。
 汚れた霊を追い出し、あらゆる病氣、あらゆるわずらい
 をいやす権威をお授けになった「使徒」は派遣者の権
 威を派遣先で代表し、実行する。9・35における主イエ
 スのいやしのわざの代行である。

2～4 十二使徒の名前が列挙されている。マルコ3・
 16～19、ルカ6・13～16、使徒1・13にも使徒のリスト
 がある。接続詞「と」(ギ)カイ)で二人ずつが結ばれてい
 るのは、主が弟子たちを二人一組で派遣された(マルコ
 6・7、ルカ10・1)ことの反映であろう。マタイのリ
 ストはマルコとほぼ一致するが、マルコ・ルカが「マタ
 イとトマス」なのに対して本書ではマタイの名が後に記
 され、さらに他のリストにはない**取税人**の語が付加さ
 れている。著者マタイの謙遜を表していると見て良い。
 5～8 弟子たちに対する命令、派遣の内容である。イ

スラエルの家の失われた羊のところに行け 主はペンテコステの後にサマリヤ人や異邦人への宣教を計画しておられたが、まずイスラエルのメシアとしてユダヤ人に宣教する必要があった。マタイ15・24参照。『天国が近づいた』と宣べ伝えよ 使徒(アポストロス)の主要な任務はメッセージを伝えることであり、その内容は主ご自身が宣教していた御国の福音である(マタイ4・17、23、9・35)。マタイは「神の国」よりも「天国」という表現を多用する傾向があるが、実質的には「神の国」と同義である。「今、ここに」実現しつつある神の統治を表す。病人をいやし…悪霊を追い出せ いやしと悪霊に対する勝利は「御国の福音」とセットになって、神の国の到来を示す出来事である。

8後半〜15 派遣された者の生活についての教えである。働きに対する報酬は受け取らないよう命じられている。その一方、援助者がある場合には進んで援助を受けることによって働きに専念するように教えている。平安は〔ハ〕シャロームに対応する言葉。ユダヤでは普通の挨拶だが、主イエスは彼の弟子たちが訪れた家に「シャローム」を祈ることに特別な意義を持たせている。

16 以下、迫害について備えるよう勧告している。悪霊に対する決定的な権威と対照的に、「人々」は主の弟子に對して「羊に対する狼」のように危害を加えてくることが明言される。マタイ5・10〜12参照。この世で迫害されることは、キリストの弟子にとって不可避の「しるし」である。それゆえ、**へびのように賢く、はとのように素直で** あることが求められる。賢い(ギ)フロニモス、思慮深い)とは迫害を受けないようにうまく立ち回ることではない。花婿の来着に備えて油を用意しているおとめ(マタイ25・2)のように「大切な、守るべき事柄」をわきまえて保持することが勧められているのである。17〜23節の終末論的勧告を参照。「へび」はおそらく必要な時まで動かず静かに待つ姿を描いている(ノーランド)。素直(ギ)アケライオス)の原義は「混じりけのない」。迫害に際して純真な信仰を守り通すよう教えている。「はと」はここでは、目的地に向かって真っ直ぐ飛ぶ純真さを表しているであろう。

参考図書 織田昭『マタイによる福音』、John Nolland (New International Greek Testament Commentary)、David L. Turner (Baker Exegetical Commentary)。

聖書

マタイ14・13〜21

タイトル

5つのパンと2匹の魚

パンくずの残りを集めると、十二のかご

暗唱聖句

にいっぱいになった。

マタイ14・20

目 標

所有する物、また自分自身を、神に献げる。

導入

(櫻井めぐみ)

最初の言い出しっべは弟子たちでした。夕方になって、弟子たちが食事の心配をし始めたのです。ここには全員の分の食べ物はありません。でもイエス様は敢えて弟子たちに言われました。「あなたがたの手で」あの人たちに何か食べるものをあげなさいって。

ムチャなことを言われるイエス様

イエス様はなんてムチャなことを言われるのだろう。弟子たちがそう思っても仕方ありません。でも、弟子たちはまだイエス様のことを本当には理解していませんでした。イエス様は神のひとり子であり、救い主であり、どんなことでもできるお方なのということ。人間には無理なことでも、イエスさまにとっては全然無理じゃない

い。だってイエス様は全能の神だから。イエス様はそのことを彼らに知ってほしいと思いました。だからイエス様は、敢えてムチャなことを言ったのです。それに対する弟子たちの答えは、「わたしたちはここに、パン5つと魚2ひきしか持っていません」というものでした。弟子たちのこの言葉の陰に「これっぽっちの食べ物で、全員に行き渡るわけがない。無理だ!」という思いが隠れています。しかしイエス様は弟子たちに、「自分にはできない。無理だ!」という現実ではなく、ただ、イエス様ご自身に目を向けてほしかったのです。そして、こう言われます。「それをここに持つてきなさい」って。

どんなこともできるイエス様

次にイエス様はどんなことをなさったか、その行動を見てみましょう。①「5つのパンと2ひきの魚とを手に取り、」②「天を仰いで」③「それを祝福し、」④「パンをさいて」⑤「弟子たちに渡された」のです。②「天を仰いで」③「祝福し」というのは、イエス様が、天におられる父なる神様を見上げて祈ったということです。イエス様のこのお姿は、正に神のひとり子であるということとをあらわしています。そして④「パンをさいて」⑤「弟

子たちに渡された」のです。そして弟子たちの手からパンが配られました。その結果、その場にいた5千人以上の人たちが食べて満腹したのです。しかも、パンくずの残りを集めると、12のかごいっぱいになりました。イエス様は何でもできるのです。

弟子たちに渡されるイエス様

でも、イエス様はなぜ、わざわざ弟子たちにパンを渡して配らせたのでしょうか。イエス様は、どんなこともできるお方なので、ご自分の手で直接みんなにパンを配ってもよかったです。それなのに、弟子たちに渡されました。めんどうくさかったのでしょうか。イエス様は疲れ切っていたので、ご自分で全員にパンを渡すのは大変だったのでしょうか。いいえ、そうではありません。イエス様は、ご自分で何でもおできになるのですが、「**敢えて**」弟子たちにそれをさせたのです。イエス様がいないければ何もできない弟子たちに、です。これは、皆さんにも当てはまることです。イエス様は私たち人間の手なんか借りなくても、すべてのことができます。でもその働きを「**敢えて**」、皆さんの手に渡されるのです。なぜか。それはイエス様が、みんなに活躍してほしいと思ってお

られるからです。イエス様なしには私たちは何もできません。しかし、人間には無理だと思われることも、イエス様が一緒にいてくださるなら、どんなことも私たちにできます。そのことを、この私たちの生きている世界の中で、みんなにあらわしていつてほしい。他の人たちに示していつてほしい。それが、イエス様の願いなのです。

まとめ—自分を神に献げて生きる

神様は、ここにいるみんなに対して夢を持っています。みんなと、この世界に対する夢を持っているのです。神様はこの世界を、すばらしいものにしたいと願っておられます。だからみんなに、神様の愛と力、正義を、周りの人たちにあらわしていつてほしいのです。なぜなら、神様はみんなを愛しているから。神様は何でもできるけれど、**敢えて**みんなを用いたいと願っておられるのです。愛しているからこそ、みんなに活躍してほしいのです。イエス様が一緒ならみんなにはどんなこともできるので。そのことを信じて、神様に自分をささげて歩んで行きましょう。

♪主がわたしの手を♪（新聖歌474、イン41、ホ146）

聖書 マタイ14・13〜21 テーマ 祝福されるささげ物

序論

(高橋頼男)

「パンの奇跡」については四福音書がこぞって取り上げています。この奇跡は、イエスのお働きの生涯における頂点を示すものでした。パンの奇跡、すなわち五千人の給食物語は、すべての人に感動的で、だれにも無条件に喜びをもたらした出来事です。へみんなの者は食べて満腹した」とありますが、やはり食べて満ち足りることの経験は記憶の中にいつまでも残るものなのでしょう。

この奇跡の起こりは、五千人を超える飢えた群衆を前にして、小さな取るに足らないもの、パン五つと魚二匹が主の前に持ってこられ、ささげられたことでした。

一、あなたがたの手で(16)

弟子たちは、これほど多くの飢えた人々の食事を準備することは、自分たちの手にはとても負えないと判断しました。そこで、群衆を解散させ、彼ら自身がそれぞれ食べ物を求めることを提案しました。この弟子たちの判断と提案は、この状況においてきわめて常識的なもので

した。いわゆる群衆の「自己責任」に委ねたのです。しかし、イエスのお考えは違っていました。イエスは「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物をやりなさい」と言われたのです。そこで、彼らが持っているものを探すと、パン5つと、干し魚が2匹ありました。しかも、これは少年がもっていたお弁当だといえます。彼らはこれらを数えて「それが何になりますか」(ヨハネ6・9)と言いました。ここにはパン5つと魚が2匹よりほかに、自分たちの持てる物は、全く無に等しいことを認めざるを得ません。疲れ、飢えた大群衆の前に、弟子たちは何と小さく無力であったことでしょう。

二、それを、ここに持てきなさい。(18)

弟子たちが途方に暮れていると、主は「それをここに持てきなさい」と言われました。自分たちの持っているものを、いきなり人に与えるのではなく、まず、それを主のもとに持って行くこと、主におささげすることを命じられました。主はその小さな貧しいものを受け取られ、御手に取って祝福されました。そして、主が祝福されたものを再び弟子たちの手に委ねられたのです。弟子たちはそれを群衆に配りました。そのとき、人々は食べ

て満腹し、満足し、残りのパンくずを集めると十二のかご一杯になりました。

私たちのささげものがどのようにして主に用いられるのか、その過程を大切にしましょう。なぜなら、私たちの小ささ、無力さに、主の祝福とその全能が臨む時、私たちは主にあって大きな働きを担うことができるのです。

ひとりの少女が言いました。「小さなわたしだけでは、何も出来ません。しかし、わたしの手の中にある六ペンスと、そこに神の御手が加えられるなら、どんなことでも出来るのです！」

パウロも言います。「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができ」(ピリピ4・13)。

三、祝福されるささげもの

小さなもの、とるに足らないものであっても、主に小ささげするとき、主はそれを手に取って、きよめ、祝福し、お働きのため、人々のために用いてくださいます。しかし、この小さなささげもの、「五つのパンと二匹の魚」は、どんなに小さくあっても、少年の持っているすべてであり、弟子たちが集めた全部であつたのです。

主が、「だれよりも多くささげた」と言われた、やもめの手に握られたレプタ二つは、宮にささげることが許された最少額でした。しかし、やもめの2レプタは、彼女の生活費のすべてだったのです(ルカ21・1〜4)。

主が祝福されるささげものは、適当なもの、余裕を残したものの、まして、余りものなどであるはずがありません。主が喜んで受け入れられるささげものは、小さくても、貧しくても、私の全てであり、私のベストであるはずです。わたしたちのささげものの、奉仕に対して、主は「それが、あなたのベストですか？」とやさしく問いかけられます。「あなたは…恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」(IIテモテ2・15)。

結論

わたしたちは、自分が主の働き人としてまことに小さく、卑しく、弱いものであることを知らされます。しかし、そのようなものを喜んで受け取り、きよめ、祝福して、御手の中で豊かに用いて下さる主を信頼し、私のベストをおささげしていきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

四つの福音書に共通して登場する奇跡は、受難と復活の記事を除いてはこのパンの奇跡だけである（並行記事は、マルコ6・30～44、ルカ9・10～17、ヨハネ6・1～14）。言うまでもないことであるが、受難と復活の記事はイエスの出来事のクライマックスである。では、なぜこの記事がすべての福音書に描かれているのだろうか。それはまず、この奇跡が弟子たちにとって非常に大きな出来事であったということである。それまでは個人的な癒しの奇跡であったものが、このような大群衆を前にしての、しかも大群衆のための奇跡へと発展してきたのである。そして次には、この奇跡の持つ霊的な意味の重要性の故である。ヨハネによる福音書では、この奇跡の後に「わたしが命のパンである」（ヨハネ6・35）と語られた。このパンの奇跡は、古来より様々な解釈がなされている（詳細は省略）が、「いのちのパン」であるイエスによって文字通りに行われたものである。

テキスト

13 このこと この個所の直前に描かれているバプテスマのヨハネの殺害に関する記事のこと。バプテスマのヨハネの死は、イエスにとっては衝撃的な出来事であったであろう。注解者の中には、このヨハネの死をイエスの死の伏線ととらえる者もいる。**舟に乗って** イエスが向かった先は、ガリラヤ湖の向こう岸（ヨハネ6・1）であり、その目的は寂しい所へ行かれるためであった。

14 あわれんで マルコの並行記事では、この言葉の前に「飼う者のない羊のようなその有様を」（マルコ6・34）とあり、イエスがこの群衆をどのようにご覧になっているかをよく示す言葉として注目される（マタイ9・36）。**15 夕方になった** 夕食どきになってしまった、という意味が込められている。**群衆を解散させ、**、**村々へ行かせてください** この言葉は、弟子たちの現状認識としては極めて常識的な判断だったであろう。しかし、ある注解者は、弟子たちがカナの婚礼の奇跡（ヨハネ2・1～11）の出来事を心にとめていたならば、このような言葉を出すことはなく、イエスに期待したであろうと述べている。

そうでなくても、弟子たちがこの直前にイエスの手を通

してなされたいやしのわざを覚えていたなら、やはりこのような言葉は出なかったであろうと考えられる。いずれにしても、常識にとらわれていた弟子たちには、目の前の主のわざが見えなくなっていたのであろう。

16 あなたがたの手で 前節の弟子たちの言葉に対して、イエスには他の考えがあった。それは、弟子たちがこの群衆を養うことであつた。

17 わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っています この弟子たちの言葉は、やはり前節のように現実しか見えない弟子たちの言葉である。「しか」という言葉にそれがよく表れている。わたしたちは持っていないのである。しかしこの言葉は同時に、次節の弟子たちの行為によってイエスの御業を引き出すという意味で、なくてはならないものだったともいえる。パン五つと魚二ひき ヨハネの並行記事を見ると、おそらくこれは少年のお弁当だったのではないかと推測できる（ヨハネ6・9）。このパンと魚は、当時の人々のごく普通の食物といわれており、特にパン（ヨハネ6・9では「大麦のパン」）は当時の貧しい人々の食物であつた。

18 それをここに持つてきなさい たとえ「五つのパン

と二ひきの魚でしかない」と思ったとしても、主はそれを用いて御業をなされる。主は、いかなる献げものであつたとしても、神の国の御業のためには弟子たちが持つてきたものを喜んでお用いになるのである。

19 マルコの並行記事にみられる詳細（マルコ6・37〔38〕）はここでは省略され、かわつて弟子たちが直接手渡した姿が強調されている。弟子たちにとっては、イエスの素晴らしい御業に直接関与できる、これ以上ない素晴らしい機会であつたであろう。

20 十二のかご 十二弟子を指す数字であるとも、イスラエルの十二部族を指す数字であるとも考えられている。

21 女と子供とを除いて 当時のユダヤ社会では、納税と徴兵の義務を負っていた成人男性のみを人数として数えていた。マタイはそのような会衆に対して福音書を書いたで、このような表現となっている。女性と子どもを加えた実際の人数は、一万人とも二万人とも言われる。

参考図書 デレク・ギドナー『ディンデル聖書注解 創世記』、小畑進『創世記講録』（以上のちのことば社）

聖書

マタイ14・22〜33

タイトル

水の上を歩くイエス様

暗唱聖句

しっかりとするのだ、わたしである。恐れることはない。
マタイ14・27

目標

人生の逆風の中でもキリストを見上げ、信仰をもつて前進する。

導入

(松浦みち子)

二〇二〇年二月のことです。中国のある町で新型コロナウイルスの肺炎が発生しました。またたく間に、このウイルスは世界中に広がり、教会でも様々な働きがストップするという出来事が起こりました。この病気にきく薬も予防薬もないという非常事態がWHO（国連世界保健機関）でも問題となり、世界中が大変なことになりました。地震、津波、豪雨、思いもよらないウイルスによる病気発生。わたしたちはどう生きていったらよいでしょうか。

心を騒がせない

ある時、イエス様はパン5つと魚2匹で5千人以上も多くの人々のために食事の用意をするという奇跡のわざ

をなさいました。弟子たちもそのお手伝いでへとへとになりました。その様子をご覧になったイエス様は弟子たちを休ませるために先に舟に乗せ向こう岸に行くようにとおっしゃいました。イエス様は群衆を解散させたのち、お祈りをするために山に登られました。父なる神様との静かな交わりは、力と勝利の秘訣ですね。イエス様は長い間、お祈りをされたので辺りはもう真つ暗です。それでもまだお祈りは続きました。

そのころ、先に舟に乗って海の上にいた弟子たちはどうしていたのでしょうか。舟ははじめスイスイと調子よく進んでいきました。ところが思いがけない逆風が吹いてきたのです。弟子の中にはペテロをはじめ、ガリラヤ湖の漁師たちが何人もいました。それで自分たちの経験を生かしてあれこれと舟をあやつるのですがどうにもこうにもなりません。それでも弟子たちは必死に舟をこぎ続けていたのです。時はもう夜明けの4時ごろです。祈りを終えたイエス様は、海の上を歩いて漕ぎ悩んでいる弟子たちのほうに行かれました。弟子たちは、向こうのほうから何やら白いものが近づいてくるのを見て、「ウェア、幽霊だー。おぼけだー」と騒ぎ出しました。そ

の時、イエス様は弟子たちに声をかけられ、「しつかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われました。

「おいでなさい」

イエス様を見たペテロはこう言いました。「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください。」「おいでなさい。」とイエス様は言われました。ペテロは舟からおりてイエス様めがけて行きました。あら、不思議！ 水の上が歩けるのです。ところが激しく吹く風に気を取られ、イエス様から目を離れたとたん、あっという間に海に沈み溺れおぼそうになりました。「イエス様、助けてください！」と叫びました。イエス様はすぐに手を伸ばし、ペテロをつかまえて助けてくださいました。そしてこう言われました。「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と。

嵐はやんだ！

ペテロとイエス様が舟に乗り込むと、あれほど荒れ狂っていた嵐は嘘のように止んでしまいました。弟子たちは、イエス様が自然をも支配される力あるお方であることが分かりました。そして、「ほんとうに、あなたは神

の子です」と告白しました。

さて、この出来事をみんなで考えてみましょう。先ずはじめに、舟に乗って海を渡った弟子たちはどうだったでしょうか。弟子たちは舟に乗り込む前に、少しのパンと魚でイエス様が多くの人々の空腹を満たされる奇跡を体験しました。その秘訣は、イエス様が父なる神様に祈られたから起こった奇跡の業でした。にもかかわらず弟子たちは、突然の嵐が襲って漕ぎ悩んだとき、すっかり神様のことを忘れ、祈りもせず、自分の経験でことを解決しようと、ああだ、こうだと言って、焦あせっていました。しかし、イエス様が近づいて「わたしだ、恐れるな」と声をかけて下さり舟に乗り込まれると嵐は止やまりました。

また、ペテロもイエス様から目をそらさずに歩くと、水の上だつてへっちゃらで歩きました。しかし周りに気を取られると溺れそうになりました。わたしたちは思いがけない様々なできごとに出会った時、まず祈りましょう。そしてイエス様から目をそらさないで歩みましょう。「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」(ヘブル12・2)。

♪主にしたがうことは♪(コ改19、こ53、ホ87他)

聖書 マタイ14・22～33 テーマ 嵐を静めたイエス

序論

(高橋頼男)

パンの奇跡に喜び興奮した群衆がご自分を王にしようと熱狂しているのを知られたとき、主イエスは、群衆と弟子たちを分け、弟子たちを強いて船に乗せて向こう岸へと出発させ、また、群衆を解散させられました。そして、ご自分は、一人で折るために山に登られたのです。

一、逆風に漕ぎ悩み、恐れる弟子たち (24～27)

主イエスに強いられて船に乗り込み、向こう岸を目指して出発した弟子たちでしたが、沖で向かい風に悩まされ、思うように進むことができません。夜通し漕ぎ、疲れて、夜中の三時頃になって暗闇が最も増すとき、イエスが水の上を歩いて来られるのを見ました。弟子たちは「幽霊だ!」と言って、叫び声を上げました。

ここには、逆風を恐れ、暗闇を恐れ、さらに、湖を歩いて近づくられる主イエスを幽霊と見間違えて恐れる弟子たちの姿があります。彼らは信仰ではなく、恐れに満ちています。私たちの信仰生活の中でも、厳しい現状に捨

て置かれたような思いになって不安と恐れに捕えられ、不信仰に支配されてしまうことがあります。主イエスに従って船に乗り込み、漕ぎ出したはずなのですが、暗闇の中で漕ぎ悩んでしまいます。しかも、船の中に主はおられず、逆風がいよいよ吹き荒れ前進できません。逆風とは真正面から吹いてくる風です。これからどうなっていくのか全くわからない不安と焦り、恐れに捕らわれてしまうのです。しかし、私たちが主イエスとそのみ言葉に従っているのなら、暗闇も逆風も決して恐れることはないのです。なぜなら、主イエスはどんな状況の時にも私たちのことを見ておられ、執り成していただくからです。そして、闇が最も濃くなる時、私たちの思いもよらない方法で、私たちを助けるために近づいてくださり、船に乗り込んできて、すべてを支配し静めてくださるのです。主は弟子たちを強いて船に乗り込ませられ、湖の中で試みに会わせられました。これは主の訓練であつたと思われます。同様に、主はわたしたちをも、沖に漕ぎ出させ、暗闇と向かい風のただ中で、主に信頼することを教えられるのです。

二、おぼれたペテロ (28～30)

湖の上を歩いて近づいてこられるのがイエスであることを認めたペテロは、おそばに行きたいと大胆な願いを口走りました。「主よ、あなたでしか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。すると、主はペテロの求めに対して「おいでなさい」と言われました。ペテロが船から一步、水の上に踏み出したとき、なんとペテロは水の上を歩いていったのです。主のお言葉を聞き、お言葉に信頼して一步を踏み出すとき、まさしく信仰による世界が開かれるのです。ところが、ペテロが風の音を聞いてふと波を垣間見た瞬間、たちまち恐れが彼の心に入りました。そして、その恐れはたちまち彼の心と意思を支配したのです。その結果、ペテロは信仰を失って、ぶくぶくと沈んでしまったのです。彼は大声で「主よ、お助けください」と叫びました。そんなペテロに主はすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われました。

私たちも、主ご自身から目を離して波風の音に反応して現実を見るなら、たちどころに主のおことばへの信頼を損ない、信仰の世界から離れ、自分をとりまく現実のみが大きくなってしまいます。

三、逆風の中で主イエスを見る（ヘブル12・2）

ペテロはなぜ沈んでしまったのでしょうか。彼は主イエスのみ顔を見、「おいでなさい」と言われたお言葉を聞いて一步踏み出した時、湖の上を歩きました。しかし、風の音を聞き主イエスから目を離して、他のものに目を向けた瞬間、恐れが彼の心と意思を支配して主に対する信頼を失わせてしまったのです。それは、彼が「水を踏む信仰とその歩み」を失った瞬間でした。

思いがけない困難が襲ったとき、苦しみや悲しみが押し寄せるときにこそ、イエスを仰ぎましょう。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」（ヘブル12・2、新改訳）。私たちがいつも心かけるべきことは、イエスから目を離さないこと、どんな場合、どんな状況からでも真つ直ぐにイエスを仰ぎ見ることです。「わたしは絶えず主に相対しています」（詩篇16・8、新共同訳）。

結論

主イエスから目を離さないでいましょう。いつでもどこからでも、何度でも、主イエスを仰ぎましょう。そして、生きた信仰の歩みを導いていただきますように。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

22 それからすぐ 前節までのいわゆる「五千人の給食」の奇跡の後。並行記事のマルコもヨハネも、この二つの記事はセットで登場しており、この二つの物語を相補的に理解しなければならないことになる。そして イエスの強い意志が表された非常に強い言葉である。弟子たちには、自らの行動を選択する決定権はない。

23 祈るためにひそかに山へ登られた 福音書においては、イエスの宣教活動における重要な出来事の前や後には、(山に登って)祈るということがしばしば言及される。

24 数丁 直訳は「多くのスタディオン」(1スタディオンは約200m)。マルコによれば、この時舟は「海のまん中」(マルコ6・47)にあった。逆風 ガリラヤ湖特有の突風。

25 夜明けの四時ごろ 新改訳第3版では「夜中の三時ごろ」となっている。直訳では「第四の夜回り」となる。当時のローマ人は、午後6時から午前6時までの間を四等分して時間帯として用いていた。つまり第4の区分である午前3時から6時までの間を指す。彼らの方へ行か

れた イエスは弟子たちを見捨てられることは決してない。山での祈りを終えられると、イエスは弟子たちの方へと歩みを進められるのである。あるいはイエスは困難に直面した弟子たちを助けるのに最も良い時を知っておられたのであろう。

26 幽霊 この言葉は当時のユダヤ人たちには至極一般的なものであった。この言葉はいかなる幻影にも用いられていた。おじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた「おじ惑い」「恐怖」「叫び声」といった同種の言葉が繰り返されており、弟子たちの驚きがどれほど大きかったかをよく表している。なお、イエスの現れに対して弟子たちがイエスを見分けることができなかったのは、エマオでの顕現(ルカ24・13)、テベリヤ湖での顕現(ヨハネ21・4)においても見られる。

27 わたしである(ギ)エゴ・エイミ 直訳は「わたしこそ」。神の自己啓示の言葉であって、ご自身を旧約聖書のヤーウェと同一視された言葉である(出エジプト3・14、イザヤ43・10)。このイエスこそ生ける神であって、風と波との支配者であるとの宣言の言葉である。恐れることはない 直訳は「恐れることをやめなさい」と

なる。

28 この個所から後の言葉は、並行記事であるマルコヤヨハネにはない。マタイ独特の個所である。主よ、あなたでしたか 新改訳聖書では「主よ、もしあなたでしたら…」と疑問形で訳している。しかし、この呼びかけは、前節の「わたしである」に対応しての「あなたなのですから」(直訳)という全能の神、自然の支配者への呼びかけの意図が込められていると考えられる。

29 おいでなさい イエスの答えはこの一言のみである。しかし、主の弟子にとつてはこの一言だけで充分であった。

30 風を見て それまでのペテロは、ただイエスのみを見ていたということの裏返しとしての言葉。主よ、お助けください 天の御国の民にとつては最も大切な言葉である。

31 信仰の薄い者 イエスはここで「信仰がない」とはおっしゃらなかった。「信仰が薄い」のであって、「信仰が少ない」「信仰が足りない」という意味である。信仰とは、主と主の言葉に信頼することであり、ここではイエスの「おいでなさい」という言葉のみを頼りにして、主

から目をそらさずに歩むことであつた。信じつつも信じきれない弱い弟子の姿がここに表れている。疑つたギリシャ語の原意は「二つに分かれる」である。一方では信じつつも、他方では嵐に氣をとられて心が二つに分かれてしまうことである。

33 マルコにはこの弟子たちの告白は省略されている。弟子たちは同様の経験をすでに8・23〜27においてしていた。しかし、五千人の給食の奇跡とこの出来事によつて、彼らの告白はイエスを「神の子」として礼拝するまでに至つた。まさにこの個所の中心は、イエスが誰であるかということを示しているのである。

参考図書 D・R・A・ヘア『マタイによる福音書(現代聖書注解)』、デイヴィッド・ヒル『マタイによる福音書(ニューセンチュリー聖書注解)』(いずれも日本基督教団出版局)他

聖書

マタイ15・21～28

タイトル
暗唱聖句イエス様にほめられた婦人(フリーデー)
女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように。

マタイ15・28

目標

謙遜でありつつ、大胆な信仰によって祈る者となる。

導入

(松浦みち子)

まだまだ暑い日が続きますが、今日はラリデーです。心と身体バランスに気をつけて過ごしましょう。

水野源三さんという方は、小学校四年生の夏、赤痢のため高熱が続き、ついに脳をおかされ、脳性小児麻痺になりました。手足が自由に動かせなくなったばかりか、ものも言えなくなつて、まばたきすることしかできなくなつてしまいました。しかし、やがて家を訪問してきた牧師を通し、聖書を知り、ラジオ放送を通して、信仰を持つようになられました。そしてお母さんが考案されたまばたきで「あいいうえおの五十音字」をたどる方法で、一字一字を拾い集め、自分の思いや考えを外の世界に発

信し、すばらしい詩や短歌を生み出されました。子どものためならどんな事でもする、というお母さんの献身的な愛の労苦はなんと素晴らしいことでしょう。

病気の娘をもつお母さん

イエス様がツロとシドンとの地方に行かれた時のことです。その地方出身のカナン人の女の人がイエス様の姿を見て近づいてきました。「主よ、ダビデの子よ!」その声はだんだん大きくなり、「主よ、ダビデの子よ!」と叫び続けます。そして、「わたしの娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます。助けてください。」

ところがイエス様は、なんにもおっしゃらずに黙って歩いて行かれます。しかし、このお母さんはあきらめずに、イエス様について行き、「主よ、ダビデの子よ!」「主よ、ダビデの子よ! わたしの娘の病気をなおしてください」と叫び続けるのです。弟子たちは困ってしまつて、「イエス様、このうるさい女の人を追いつめてください。叫びながらついてきますので!」と。お母さんは必死です。諦めずに叫び続けました。あまりにもうるさく叫び続けるので、とうとうイエス様は、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわれていな

い。」とおっしゃいました。どういう意味かというと「わたしは、イスラエルの人々以外には遣わされていません。」ということです。

イエス様の福音は、全人類のためのものですが、地上での生涯を送っておられたイエス様は、限られた時間の中でイスラエルの宣教に専念しておられたからです。

しかし、このお母さんはイエス様のこのような冷たく感じる言葉を聞いてもあきらめません。たしかに、自分は偶像の神を礼拝する国の者ではあるが、イエス様をダビデの子であり、救い主であると信じていたのです。ですから、あきらめずになおもイエス様に近寄り、「主よ、お願いです。お願いです。お願いです。わたしの子どもを助けてください!」と叫び続けました。

娘の病気を癒されるイエス様

そしてイエス様の足もとにひざまずいて、もう一度「主よ、わたしをお助けください」と言いました。するとイエス様はお答えになりました。「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」と。

「子供たち」とはイスラエル人のことです。「小犬」とは、イスラエル以外の国の人をさします。つまり、「イス

ラエル人より先に、他の国の人を助けるわけにはいきません」と、おっしゃったのです。だれでも、自分や自分の国の人を犬にたとえられたらむっとして、嫌ですね。しかし、イエス様はこの女の人の信仰を試すために、おっしゃったのです。この女の人は、「はい、おっしゃる通りです。確かにわたしは偶像を礼拝している国の者です。けれども、子犬でも、食卓から落ちるパンくずはいただきます。」と答え、「自分はイスラエル人ではないけれども、信仰によって恵みのおこぼれはいただけるのではないでしょうか」と謙遜に答えました。

この答えを聞いたイエス様は、この女の人の信仰をたいそう褒めました。「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」と。そして、このお母さんの願いどおり娘の病気を癒して下さいました。あきらめないで祈り続けましょう。

「ただ、疑わないで、信仰をもつて願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は、主から何かをいただけるもののように思ふべきではない」(ヤコブ1・5～6)。

♪祈ってごらんわかるから♪ (イン70、新聖歌481他)

聖書 マタイ15・21～28 テーマ 見あげた信仰

序論

(宮澤清志)

イエスがその公生涯で唯一外国にまで足をのびされた時、不信仰な弟子たちとは対照的に、立派な信仰の異邦人の女性との出会いがありました。

一、切なる求め

ユダヤ人は異邦人との接触によって宗教的に汚れることを恐れていました。ユダヤからガリラヤに行くのに、近道であるサマリヤを避けてわざわざ山地を行くのと同じで、フェニキヤ人の地に足を踏み入れることはありませんでした。

ユダヤ人との交わりがほとんどなく、ギリシア文化の影響を強く受けているフェニキヤの「カナンの女」が、イエスを「主よ、ダビデの子よ」と呼び、あわれみを請うたのは驚きです(参照8・25、9・27)。この言葉は、ダビデ王国の救い主の意味を知り、異邦人もその恵みに与^{あずか}れることを知っている人の表現だからです。

娘が悪霊に取りつかれているという悩みを抱えていたこの女は、一縷^{いちろ}の望みをかけてイエスについて調べ、救い主としてのイエスに期待して訪ねてきたのでしよう。イエスが密かに行かれたにもかかわらず、彼女は見つけだして訪ねてきました。そして、イエスに「主よ、ダビデの子よ」と呼びかけました。イスラエルの真の王、救い主としてのイエスをすでに知っていたのです。人は苦しみの中でこそ、まことの神様を求めるものです。この女性もそれ故にイエスに出会うことができたのです。

二、信仰の成長

イエスの態度は、一見つれなく見えます。まずはじめは、無視されました。実は、イエスはこれまで、求める者を拒否したことがありませんでした。だから、弟子たちは違和感を覚えながら、イエスにはつきり応答するように提案したのです。次にイエスは、まるで拒否しているように見える言葉を発します。しかし、イエスはこの女性の信仰が本物になることを期待しておられたのです。さらに、「子供たちのパンを取って小犬に投げてや

るのは、よろしくない」という言葉に、軽蔑^{けいべつ}の語感はありません。この女性の信仰を引き出すために、ユーモアを持って柔かく拒否されただけです。冷たく突き放す言葉ではないのです。新約聖書で、「犬ども」とは異邦人の蔑称^{べつしやう}ですが、「小犬」とはペットのことです。「ペットより家族が先ですよ」というニュアンスです。だからこそ、彼女はイエスの言葉を受け入れつつ、食い下がることでできたのです。そして、その信仰告白はイエスに認められたのです。「その言葉で、じゅうぶんである」（マルコ7・29）と。

イエスは、すぐに求めに応じないことでこの女性の信仰を引き出し、その上で願いに応えられました。私たちなら、どう応答するでしょうか。この女性のように、謙遜な信仰で食い下がる事が出来るでしょうか。

三、見あげた信仰

〈女よ、あなたの信仰は見あげたものである〉と、イエスにほめられた信仰とは何だったのでしょうか。「信仰が大きい」（28節、直訳）というイエスの言葉は、信仰が小さい弟子たち（8・26、14・31、16・8）と対照的で

す。何度もとがめられている弟子たちとは違って、絶賛の響きがあります。実は、イエスに信仰をほめられた人は多くありません。この女性と、百卒長に対しての二回だけです（マタイ8・5〜13）。

この女性は、①どこまでも謙虚な姿勢で神の恵みを求め、②イエスの言葉を素直に受け入れ、③イエスの譬えに信仰による理解力をあらわしました。そのような信仰が、「見あげたもの」とイエスに認められる信仰なのです。

結論

私たちも、熱心に主の恵みを求めながらも、〈主よ、お言葉どおりです〉と、すべてを委ねた謙遜な信仰を目指しましょう。〈ダビデの子〉とイエスの本来の姿^{ゆた}を認め、「小犬」と自らをへりくだり、娘^{いや}が癒されたのを見ないでも信じた信仰です。神様はそのような信仰者を、今も求めておられるのです。

そして、そのような信仰に進む者は、神様の御業を経験することができるのです。

「そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた」（マルコ7・30）。

研究資料

(加藤 満)

マタイによる福音書において、イエスは異邦人への奇跡と宣教を行い（マタイ8・5～13、28～34）、神の国の到来が異邦人に及ぶことを示唆している（マタイ22・1～10）が、自らと弟子達の働きを意図的に「イスラエルの家の失われた羊」（マタイ10・6、15・24）に限定している様にも見える。このカナン人の女性に対しても、イエスはユダヤ人と異邦人の間を隔てるような溝を示している。しかし、そうであるにも関わらず、この女性は粘り強い積極的な信仰を示し、イエスはローマの百人隊長に対してと同じように、その立派な信仰に驚嘆するのである。

この個所が、パリサイ人や律法学者とイエスの聖と汚れに関する論争の後に置かれていることは注目すべきである。本来、ユダヤ人から汚れていると見なされるカナン人の女性が、イエスを「主よ、ダビデの子よ」と告白し、イエスから信仰が立派と認められ、エルサレムの宗教指導者が、イエスが何者かわからないのである。後のイエスの宣教の展開を示唆している。

テキスト

21 ツロとシドン 現在のレバノン。24節で明らかのように、この異邦人地域への訪問は伝道目的ではない。むしろ論争と大衆の人気による精神的疲労から、退くために来られた。

22 カナンの女 「カナン人」は新約聖書でこの個所しか用いられない。おそらく旧約聖書の時代にイスラエル民族が忌み嫌い、縁を絶つべき民族（エズラ9・1）とされていたことを強調するためであろう。主よ、ダビデの子よ 異邦人でありながら、この女性はイエスについてユダヤ人のメシアとしての期待についておぼろげに聞いたのであろう。「ダビデの子」は奇跡といやしの文脈でよく用いられる（例としてマタイ9・27、20・30～31）。**叫びつづけた** 未完了時制。連続的に繰り返し叫んだことになる。

23 しかし、イエスはひと言も この様にイエスが助けを求める者に対し沈黙を守られるのは初めてである。しかし、異邦人の女性の嘆願を聞き、その女性の信仰がどのようなものであるかイエスは知ろうとしている。

24 わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者に

は、つかわれていない イエスはご自身の使命が第一義的にイスラエルの回復であることをここで示される。そして、全面的にイスラエルがイエスを拒絶した後に、福音は神の国の実を結ぶ異邦人へと広がっていく(マタイ21・43)。しかし、その最終的な拒絶の時まで、イエスはイスラエルを優先しなければならなかった。

25 イエスを拝して ひれ伏して。礼拝の姿勢であり、一切の希望を託している姿勢である。わたしをお助けください 「助ける」(ギ)ボエーセオー)は「悲鳴をあげて叫ぶ」と「走る」の複合動詞。緊急の助けが必要となさの言葉である。

26 子供たちのパンを取って 「子供」とはユダヤ人。「小犬(犬)」は当時ユダヤ人の間で使われていた非ユダヤ人に対する慣用表現で、野良犬が通りをうろつき、何でもあさる様を非ユダヤ人の儀式的不浄さになぞらえたものだった。しかし、イエスは意図的にここでそのイメージを和らげ、その代わりに番犬として一家の残りもので餌づけさせる飼犬を用いた。

27 主よ、お言葉どおりです。でも 女性はいエスの第一義的な使命がイスラエルに対するものであると理解し

た上で、更に小犬と呼ばれても、謙遜と服従をもってその事を受け止めている。しかしそうでありつつも、この女性の熱心さは冷めることがない。何故なら、彼女にとつて、娘の救いは今、必要な救いだからである。この女性はいエスにおいて表される神の力が、ユダヤ人にも異邦人にも全ての者に豊かに溢れ、イスラエルと共に異邦人をも救い出すことができると信じた。

28 見あげたもの(信仰) 原語では「あなたの信仰は大きい」。これは異邦人である百人隊長の信仰とも重なり(8・10)、弟子達に対する「信仰の薄い者よ」(8・26、14・31)という言葉と対比されている。信仰が大きいとは、イエスへの信頼の大きさである。パリサイ人、律法学者の偽善的信仰(15・7)とは対象に、また嵐の中で風を見つめ、恐れ惑ってしまうペテロ(14・30)とは対照に、この女性は困難の中にあつて困難を見ず、救い主であるイエスだけを見つめ続ける信頼を持っている。

参考図書 R・T・フランス『デインデル聖書注解マタイの福音書』、いのちのことば社『新聖書注解新約1』、A・M・マッケンジー『現代聖書注解スタディ版 マタイによる福音書』他。

聖書

マタイ25・1～13

タイトル

主の再臨に備える

暗唱聖句

目をさましていなさい。その日その時
が、あなたがたにはわからないからであ
る。
マタイ25・13

目標

霊の目を覚まして、主のご再臨に備えた
生き方をする。

導入

(土屋開夫)

新学期(二学期)に入りましたね。先生も子どもの頃、夏休みが終わって、また学校に行くのが辛かったです。なんてったって夏休みの間は、朝寝坊して何時に起きてもよかったからです。でも学校が始まったら、朝早く起きないと遅刻してしまいます! 遅刻したら先生に「廊下に立ってなさいっ」なんて叱られたり…、最近はそのような無いのかな?

でも、遅刻して教室に入れないよりもっと大変なことがあります。もし、天国に入れてもらえなかったら!!

今日は「目をさましていた女性」と「眠っていた女性」のたとえ話です。よく聞いてね。

油を用意していた女性と、していなかった女性

イエス様がこの世の最後の時期に、再び天から地上に來られる事を「再臨」と言います。その時、イエス様は、イエス様を信じて待ち続けていた人たちを天国に迎えて下さるのです! 先生もその日をドキドキ、ワクワクしながら、いつも楽しみに待っています。

イエス様はその「再臨」の時の事を色んな譬え話で教えて下さいました。その一つが今日の譬え話です。

当時のイスラエルでは結婚式のパーティーをする際、花婿さんとお友達が、花嫁さんの家に、花嫁さんとお友達を迎えに行きました。普通は夕方頃に迎えに行くのですが、遅くなる事もあったようです。ですから女性たちはランプを持っていないといけません。それに今のライトのように点けたり消したり、簡単には出来ません。一度つけたら、大事にその火を灯し続けるのです。そして、火を灯し続けるには油が必要なのです。

さて、この時は花婿さん達が迎えに来るのがとても遅くなって、なんと夜中になってしまいました。花嫁さんのお友達は待ち疲れて眠っていました。でも突然「さあ、花婿だ、迎えに出なさい!」と合図の声がしました。

お友達のうち5人は、ランプの油をちゃんと多めに用意していましたが、他の5人は用意していませんでした。きつと花婿たちがすぐ来ると思っていたからでしょう。ランプの明りが無ければ、暗い夜道は歩けません。油を慌てて買いに行きましたが、もう間に合いません。花婿さん達は、油をちゃんと用意していた5人の女性たちを連れて結婚パーティーに向かいました。そして部屋のは閉められ、後の5人の女性たちは入れてもらえませんでした。

イエス様を信じ続ける心

イエス様はこの譬え話によって何を教えておられるのでしょうか？ 花婿はイエス様の事です。花嫁のお友達は、イエス様を信じている私たちの事です。そしてランプの灯火は、イエス様を信じる心「信仰」の事です。では、油は何でしょう？ それは「イエス様を信じ続ける心」です。いつも信じている、そしていつまでも信じている心です！

もし、私たちがイエス様を信じる「信仰」が、短いロウソクのようならどうでしょう？ 今は点いてい

るけど、やがてスグ消えてしまうでしょう。子どもの今はイエス様を信じていても、中学生、高校生…、大人になつたら信じる心の火が消えているかも知れません。もし、そんな時に突然イエス様が天から迎えに来られたら、天国での素晴らしいお祝い会に入れてもらえなくなってしまう！ そんな事になったら大変ですね！

そうならないためには、ずっとイエス様を信じ続ける心を持つ事です！ 私たちはいつも息をし続けています。また毎日、ご飯を食べ続けています。そのように続けることは「生きること」です。聖書を読み続け、お祈りをし続け、日曜日の礼拝も、大人になってもずっと続けて下さいね！

まとめ

助け主である聖霊様は、私たちがイエス様を信じ続ける力を与えて下さいます。どんなに遅くなってもイエス様は必ず迎えに来られます。聖霊様の力によって、皆でイエス様をずっと信じ続けましょう！

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81)

聖書 マタイ25・1～13 テーマ 主の再臨に備える

序論

(石田高保)

目に見える形で天国が来るとき、つまりキリストの再臨に対してどのように備えたらよいかが語られています。

一、終末を意識する

未来を見据えて現在に準備をしておくということは、知恵深い生き方です。それとは反対に現在にしか注意を向けないならば、未来を失うことになりかねません。70年か80年の生涯のことでもそうであるならば、まして永遠の世界に備えることははるかに重大な関心事ではないでしょうか。このたとえ話はこの世の出来事に目を奪われず、イエス様から目を離さないでいるべきことを教えています。ユダヤの風習で結婚式には花嫁には10人の未婚の女性が付き添うことになっていました。そして花嫁が自分の村を出て花嫁の村にやって来たら、出迎えるのです。結婚式は日が沈んでから行われたので、全員がオリブ油で灯した灯りを持っていたわけです。ところがそのうちの5人は思慮深かったので予備の油を用意してい

ました。いっぽう残りの5人は思慮が浅かったので予備の油を用意していませんでした。そうこうするうち花嫁がやってくるのが遅かったので、乙女たちはみな居眠りをしてしまいました。そこへ花嫁が夜中になって着いたという連絡が入ります。すると思慮の浅い乙女たちの灯りは油が少ないので消えかかっていました。そこで思慮深い乙女たちに油を分けて下さいとお願いしたが断られてしまいます。仕方なく油を買いに出ている間に花嫁は到着し、花嫁と思慮深い乙女たちは披露宴の部屋に入っていました。ほかの乙女たちが帰って見たら、部屋の戸は閉められて開けてもらえませんでした。

夜中のいつに花嫁がやって来るかはわかりませんでしたが。そのようにイエス様はこの世界に思いがけない時にやって来られます。「しかし、主の日は盗人のように襲ってくる」(Ⅱペテロ3・10)。泥棒が入るといっ情報があれば準備はできますが、まさかの時にやって来ます。異端的なキリスト教を説く団体は、しばしば再臨の日時を予告し、恐怖をあおって信者を獲得しようとしてきましたが、ことごとく外れました。なぜならイエス様自身も知らないと言い、知っているのは父なる神だけだと言っ

ておられるからです。(目をさましていなさい。その日、その時が、あなたがたにはわからないからである)。これがこのたとえ話の結論です。

では目をさましているとはどういうことでしょうか。油を用意しているとは、いろいろな意味が考えられますが、一つにはイエス様の臨在を意識することではないでしょうか。イエス様が共におられることを覚えること。イエス様が見守っていて下さる、イエス様が見抜いておられると意識すること。少なくともこの世のことに心を奪われないように気をつける。目に見えるものに釘づけられないようにする。「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続く」という価値観で物事を見ようではありませんか(Ⅱコリント4・18)。

二、終末から現在を見る

イエス様の再び来られることは、ずいぶんと先のことで、自分の生きている間には再臨はないと考えたい人もいるでしょう。事実イエス様がこのたとえ話をしてからもう2千年もたつてしまっています。ならばあと千年も先のことだと決めつけてもおかしくないかもしれません。しかしこのたとえ話によれば、今晚かも、明日かも

しれないという緊迫感があります。「ある人たちが遅れていると思つていように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。誰も滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」(Ⅱペテロ3・9)。しかし主の忍耐は無限ではなく、はつきりと線を引く日が来ます。一般の人でも世の終わりを漠然と信じている人々がいます。地球温暖化、放射能汚染、地震や津波の頻発、戦争の予感、世界経済の崩壊など。まして私たちは聖書をとおして明確に知らされています。自分の目の黒いうちに主の再臨があり、世の終わりが来ると信じることは、正統なキリスト教信仰ではないでしょうか。

結論

キリスト再臨という確実にやって来る未来を基点に現在を考えられるのは、クリスチャンの特権です。永遠という視点でこの世の中を見ることができます。つまり過去や現在の出来事に考えを縛られず、物事を相対的に鳥瞰して見ることができるのです。こういうものの見方、考え方、価値観を生活の中で獲得してゆくことが、キリストの花嫁としてふさわしい歩みではないでしょうか。

研究資料

(中島啓二)

「忠実な思慮深い僕」(24・45)として、主の来臨を待ち望むべきであることを教える前章を踏まえ、この章では、まずこの「十人のおとめのたとえ」(1～13)を通して「思慮深き」の面が、続く「タラントのたとえ」(14～30)を通して「忠実」であることが扱われる。

テキスト

1 花婿 キリストを指すことは明白だろう。十人のおとめ 婚礼の一連の行事の間中、花嫁に付き添い世話をする女性たち。教会はキリストの花嫁にたとえられることが多いが、ここでは、主の再臨を待ち望む教会（あるいはクリスチャン）を、花嫁ではなく、この付き添いの女性たちになとえている。**天国は…に似ている** 天国は単なる来世のことだけではない。マタイ福音書の言う天国は、ルカ福音書の神の国（神の支配とも訳すことができる）に相当する。それはキリストの降誕によって既に地上にもたらされ（ただし未完成）、やがて終末の時に完成するものである。再臨までの「教会の時代」は、その「既に」と「未だ」が混在している状態である。そん

な中間の時代にあつて、再臨を待ちながら過ごすクリスチャンの心構えをイエスは教えるのである。あかり 棒にばる布を巻き付けた松明^{たいまつ}かもしれない。この種の松明の布は短時間で燃え尽きてしまい、その都度、別の布で包み直し、油を含ませねばならなかった。**花婿を迎えに出る** 少し後の時代のものだが、パレスチナの一般的な結婚式の手順が知られている。まず夜の祝宴に向けて、花婿が花嫁を迎えに来る。その花婿を花嫁の付き添いの女性たちが外に迎えに出る（花嫁は家の中にいたまま）。そして新郎新婦と付き添いの女性たちが行列をつくって花婿の父の家まで進んでいき、そこで祝宴が開かれるのである。時代は少し異なるが、このたとえの婚礼もほぼそのような手順であつたと考えられる。

3 思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった 花婿を待っている間も火をともしておくのか、それとも到着の報を聞いてから火をつけるのかはわからない。いずれにしても大事なことは、彼女たちは（時間どおりであるうが遅れようが）花婿が到着したならば、その時から始まる大事な役割に備えて、油を十分に用意しておく必要があつたということである。

4 思慮深い者たちは：油を用意していた 万一に備え油を用意していたことが「思慮深い」と呼ばれる理由である。油は聖霊を象徴するものとされるが、ここでもそう捉えてよいだろう（ただし、そこまで意図されていないとする注解者もいる）。

5 彼らはみな居眠りをして、寝てしまった 思慮深い者たちも寝てしまったことに注意。「目をさましていないさ」（13）というこのたとえの結論からすると、彼女たちにも落ち度があるようにも思えるが、彼女たちは叱責を受けずに、その後の役割を果たし、祝宴の恵みにあずかっている。

6 夜中に：呼ぶ声があった 「思いがけない時に人の子が来る」（24・44）とあるとおりである。

8 あかりが消えかかっています 「悪しき者のともしびは消される」（箴言13・9、ヨブ18・5参照）のイメージが背後にあるのかもしれない。

9 わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう 分け合うならば全員の油が不足し、結婚式が台無しになってしまう。主の再臨に備えておくという信仰の姿勢は、他の誰かと貸し借りできるような類のもの

のではないのである。

10 用意ができていた女たち 婚宴の部屋に入ることができたのは「用意ができていた」からであった。戸がしめられた 救われる者と滅びる者とがひとたび定まれば、もはやそれを変えることはできない。

11 ほかのおとめたち 花婿の遅れに備えていなかったばかりに、婚宴の部屋から閉め出された彼女たちは、今や「その他」の存在に落ちぶれた。

12 わたしはあなたがたを知らない 最後の審判の厳粛さを思い知らされる言葉（7・23参照）。

13 目をさましていなさい 前述のように、思慮深い女たちも眠っていたが、それはこの警句と矛盾しない。彼女たちは来たるべき時への備えが十分にできていたゆえ、祝宴に連なることがゆるされたのである。クリスチャンは再臨に備えて、日常生活に支障がでるほど気を張り詰めている必要はない。ただし霊的には目を覚まし続け、そのことによって準備が整っていることに安心し、平安のうちに再臨を待ち望み続ければよいのである。

参考図書 8月9日分と同じ。

聖書

創世記26・12〜22

タイトル

柔和な心で歩もう

柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。マタイ5・5

目標

神に信頼して、柔和な生き方を身につける。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、自分の心を点検することがありますか？

「あの人はいつも怒っている」、「あの人はいつも文句ばかり言っている」などと、人のことはよく見ます。でも、案外自分の心も他の人と同じようになっていないかも知れません。私たちの心が守られ、穏やかであることを神さまは願っておられます。イサクの姿から神さまのメッセーじに耳を傾けてみましょう。

祝福されたイサク

イサクは、アブラハムの息子です。12〜13節を読んでみましょう。ここで分かることは、イサクは非常に裕福であったということです。彼が土地に種をまけば、百倍

の収穫があり、14節では「羊の群れ、牛の群れ及び多くのしもべを持つようになった」ともあります。イサクは祝福に満ちた人でした。この祝福はイサクが努力して得た祝福ではなく、主が彼に与えられた祝福だったのです。

私たちは祝福されてるでしょうか？ イサクのように財産を持っていないかも知れません。でも、イエス・キリストが与えられています。エペソ1・3に「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神はキリストにあつて、天上で霊のもろもろの祝福をもつて、わたしたちを祝福し」と祝福が約束されています。皆さんは、自分が祝福されていることを信じますか？

ねたまれたイサク

祝福に満ちていたイサクでしたが、彼はペリシテびとからねたまれました。皆さんは「ねたま」ことを経験したことがないですか？ 人を「ねたま」ことは良いことではありません。でも、「ねたま」ことがどんなことかを体験している人は、ペリシテびとの気持ちがよく分かると思います。テストで自分よりも良い点を取った人をね

たむ、体育で自分よりも上手くできる人をねたま、たくさん友だちがいる人をねたま、自分よりも良い物を持っている人をねたま、私たちの周りにはねたま材料がいっぱいあります。また、誰かからねたまれたこともあるでしょう。イサクをねたんだペリシテびとは、イサクに何をしましたか？ その時、イサクはどんな気持ちだったでしょうか？

柔和なイサク

ペリシテびとから井戸をふさがれた後、イサクはゲラルの谷へ移動し、そこで井戸を掘りました。しかし、ゲラルの羊飼いがやってきて井戸のことで争いになりました。イサクはまた井戸を掘ります。しかしまた、争いがあったのです。イサクは、三度も井戸をめぐって辛い思いをしました。井戸を掘ることは重労働です。せっかく掘った井戸が奪われてしまう。皆さんならどのような態度をとるでしょうか。

22節を見るとイサクは、さらに井戸を掘ったことが分かります。それについては、争いがなかったのです。主に祝福されたイサクは、ねたまれ、争いを持ちかけられ

ることが多々ありました。しかし、それでもイサクは力づくで井戸を奪い返したり、相手に対して嫌味をぶついたりしたことは、ここには記されていません。

それはイサクが、多くの財産を持ち裕福であっただけでなく、彼の心も豊かであったからでしょう。主はイサクの生活と一緒に心をも祝福し彼を柔和にされたのです。

まとめ

ねたみや争いが激しくなるほど、私たちの心は波立つことがあります。自分の力で柔和になることはできません。私たちが柔和になれるとするなら、柔和であるイエス様に信頼することです。私たちはイエス様を信じ、柔和なイエス様の内に守られています。ですから、心が波立つとき、私たちの心を支えてくださるイエス様を信頼して「イエス様、私の心を守ってください！」と助け求めることです。

イエス様が与えてくださる柔和な心に支えられて歩みましょう。

♪わたしは主の子どもです♪（ホ88、イン51）

聖書 創世記26・12～22 テーマ 信仰による柔和

序論

(福井文彦)

神は飢饉きうきんの時に、イサクに対してエジプトへ行くなと命じられ、従ったイサクを祝福されました。ところが寄留者イサクがあまりに繁栄するので、土地のペリシテ人の妬みねたを買い、彼らはアブラハムが掘った井戸をふさぎ、迫害します。その後にも移ったゲラルの谷で同じようなことが起こります。そこでイサクは信仰の柔和をもつてさらに移ります。神はそのイサクを祝福されたのです。

一、主の祝福と試練

飢饉があつたにもかかわらず、イサクがその地（ゲラルのアビメレク王の地）に種をまくと、その年百倍の収穫を得ました。このような収穫は考えられないことであり、まさにこれは主の特別な祝福でした。これはリベカのことでの失敗をイサクが悔い改めた証拠であり、主の恵みでした。

このようにしてイサクは豊かになり、ますます富み栄えました。富は時として人々の妬みを招くことがあります。

す。この場合もそうでした。ペリシテ人たちはイサクの富み栄えるのを見て、妬みしました。彼らはイサクからその理由を聞いて、その信仰に倣うのではなく、妬んで迫害したのです。

そこで彼らは、イサクの父アブラハムがしもべらに掘らせた井戸をふさいでしまいました。この当時、井戸を掘るということはなかなか大変ことであり、この井戸を中心に生活が営まれていたのです。井戸の水を人が飲むだけでなく、家畜も飲みますから、井戸をふさぐという事は、大きな迫害でした。ペリシテ人たちは、この井戸をふさぎ、その土地から去らせ、イサクに与えられた祝福をとどめようとしたのです。

二、イサクの柔和

その土地の人々は、先代の王がアブラハムとの間に立てた契約（21・22～30）を無視したのです。そしてイサクにその土地を去るように要求しました（16）。彼は争いを好まぬ人ですから、一言も抗弁せず、すぐそこを去り、ゲラルの谷へと移りました。

そこでイサクはアブラハムの時代に掘られ、その後ペリシテ人がふさいだ井戸を新たに掘り直したのです。と

ところが、ゲラルの羊飼たちが「この水はわれわれのものだ」と主張すると、イサクはまたそこを去りました。

そこでもまた井戸を掘りました。ところがそれについても争いが起こり(21)、イサクはそこからも移ってほかの井戸を掘ったのです。彼は次々に譲歩して、決して争うことはしませんでした。

井戸を掘ることが容易なことではなかった当時、イサクは争いを好まず、ほかの人に譲歩できる人でした。このようにイサクは、確かに信仰による柔和な人でありました。

三、信仰による柔和

主イエスは山上の説教で、「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう」(マタイ5・5)と教えられました。

国語辞典は、「柔和」を「やさしく、おだやかなさま」とげとげしい所のない、ものやわらかな態度・様子」と説明しています。では、イエスが言われた「柔和」とはどのような意味でしょうか。

①神に対して謙虚であることです。神の摂理に対して恨みませんし、不平を言いません。また反抗することな

く、自暴自棄にならず、失望しません。神の摂理に対して静かに耐え忍ぶのです。

②いつも神のみこころに対して従順に従います。ヨセフは兄たちに売られてエジプトに行つて苦勞し、言うことのできないようなくやしきで胸がつぶれるような環境の中におりましたが、一言も不平を言いませんでした。

③柔和は御霊の実の一つです(ガラテヤ5・23)。柔和な人は、他人に対してなごやかな優しい態度が現われます。優しいことばで語り、不当な取り扱いを受けても、耐え忍んで喜んで、受け入れます。他人に寛容、温和で、自分を誇大評価しませんし、自己主張もしません。尊敬され、敬われることも期待しません。

イエスはご自身の柔和にふられましたし(マタイ11・29)、主の柔和のクライマックスは、十字架の上で表されました(1ペテロ2・22・23)。

結論

イサクが神に祝福されたのは信仰による柔和によるのです。私たちも最も柔和であられた主イエスを仰いで、柔和を学び、神に聞き従い、聖霊に満たされ、神の祝福にあずかりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今週与えられている聖書の個所を理解するには、それまでの背景をも同時に理解する必要がある。イサクも、アブラハムと同じ契約を受け継ぐためには、やはり父アブラハムと同じように訓練され、訓練を通されるのがごく自然のことであつたし、現にアブラハムもそのようにした(1、12・10)。しかし、アブラハムのときとは異なり、主は「エジプトへ下つてはならない」(2)と仰せられたのである。主の解決方法は、人物や時代により異なる。人間的にはどんなに安全で確かな方法と見えたとしても、神の御心のみが唯一の祝福への道である。だから、ここでも「主が最善を備えてくださる」という信仰が試されているのである。その結果、イサクは「この地にとどまる」(3)ようにという主の命に従って、ゲラルの地に留まる決心をする。

しかし、そこでやはり父アブラハムと同じあやまちを犯すのである(8・11、12・10)。このことは、父アブラハムの弱さがその子イサクにも臨んだことを示してい

る。それは、罪の性質がその子に伝わることを示すと同時に家庭環境の大切さをも示す事例でもある。しかし同時にこのような失敗を通して、自らの弱さと主のご介入を学ぶことは意味のあることである。

テキスト

12 エジプトへ下るな、という神の命令(2)に従った結果、イサクは神が約束された祝福(3)に与^{あずか}ることになる。当時、イサクの身の上に起こった飢饉(1)がどの程度のものなのかわからないが、その飢饉の結果、イサクは「地に種をまく」という行動に出たのであろう。

その地 ゲラル(1、6)。得た(ヘ)マーツァー)新改訳聖書では「見た」とある。この言葉は、種をまいてから世話をして収穫をする、という現代の農業のあり方ではなく、種をまいたらあとは収穫の時に行つてその収穫を見るという程度の農業のあり方を指している。百倍の收穫 豊作の年の妥当な収穫量であつたといわれている(マルコ4・8参照)。しかし、この祝福は、「主が彼を祝福された」とあるように、明らかに神の恵みによるものである。

14 羊の群れ、牛の群れ及び多くのしもべ 12節の収穫

以上に、この言葉はイサクの真の職業が牧畜中心であったことを示している。羊や牛の群れが増えた結果、多くのしもべを雇う必要が生じたのであろう。

15 この節以降、「井戸」が中心的な役割を担っている。驚くほどの穀物を得(13)、多くの羊や牛の群れを養い(14)、そして多くのしもべとともに生活したイサクにとつて、水は生命の源であつたに違いない。井戸はすなわちその生命の源としての役割を果たしていたのである。父のしもべたちが掘つたすべての井戸 アブラハムの掘つた井戸については、既にその当時のアビメレクとの間に正式に合意ができている(21・27、30〜31参照)。

16 イサクの祝福と、その祝福へのペリシテ人の妬(ねた)みの結末は、ついにはイサク追放という事態にまで発展する。あなたはわれわれよりも、はるかに強くなられたからペリシテ人にとつて、イサクは脅威に映つたのであろう。

18 アビメレクにより追い出されたイサクは、ゲラルの谷に移住した。そこで アブラハムの時に 掘つて埋められた父の井戸を再び掘つたのである。それは、イサクが多くの家畜の群れを所有しており(14)、その家畜を養うためには多くの飲料水が必要としたからであらう。ま

たこの井戸がアブラハムの井戸であるがゆえに、自らが使用する正当性もあると考えたようである。

20 エセク 「争い」「論争」という意味。しかし、直接的にはイサクではなく、イサクの羊飼いたちとゲラルの羊飼いたちとの間の争いであつた。

21 シテナ 「敵対」「敵意」など。20節での命名では、どちらかといえば目に見える形で「争い」であつたのに対して、今回の命名では、そのような目に見える争いの背後にある感情、あるいはその争いの根底にある部分^が命名の対象となつていると考えられる。

22 レホボテ 「自由の地」「広々とした地」「場所」「余地」という意。どこにいつても不和と衝突とを繰り返してきたイサクにとつて、衝突から解放され、広々とした地に到着できたことは、神の恵み以外の何ものでもなかった。旧約における救いの概念のひとつは「囲みを解かれる」ということである。この経験はイサクにとつても救いとなつたに違いない。

参考図書 デレク・ギドナー『デインデル聖書注解 創世記』、小畑進『創世記講録』(以上いのちのことば社) 他

聖書

創世記25・19〜34

タイトル

祝福をください！

暗唱聖句

一杯の食のために長子の権利を売ったエ

サウのように、不品行な俗悪な者になら

ないようにしなさい。ヘブル12・16

目標

神からの霊的祝福を大切にして、追い求める。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、大切なものを失ったことがありますか。例えばどんなのですか。財布、ゲームソフト、靴、ノートなどまだあるかも知れません。中には、大切な友だちと喧嘩別れをしてしまった人もいるかも知れません。そんな時、「もっと大事にしておけば良かった」とか「もっと優しくしておけば良かった」と後悔してしまいます。今朝の個所も大切なものを失ってしまった人が登場します。

双子の兄弟エサウとヤコブ

「信仰の父」と言われるアブラハムの息子は、エサクです。そのエサクは、リベカを奥さんに迎えました。

なかなか子どもが与えられませんでした。エサクはそのため主に祈りました。すると、エサクとリベカの間に子どもが与えられたのです。しかも、双子でした。エサクは二人をエサウとヤコブと名付けました。

皆さんは「タッチ」というタレントを知っていますか？彼らも双子です。彼らはよく似ています。でも、このエサウとヤコブは、まったく似ていませんでした。エサウは、毛深く狩りが上手で野原を走り回る人でした。ヤコブは肌がきれいでおとなしく、天幕にいたことが多い人でした。

神の祝福を失ったエサウ

エサウは、「長子の権利」を持っていました。これは、家庭で最初に生まれた男の子に与えられるものでした。簡単にいうと長男です。「長子の権利」を持っているエサウは、エサクの財産をもらうとき、他の兄弟よりも特別に二倍のものを受けることができたのです。そして、それだけではなく、おじいちゃんであるアブラハムに与えられた神様の祝福も受けられる権利が与えられていたのです。これは、とても大切な権利で、恵みの権利でした。でもエサウは、その権利を失ってしまうことに

なるのです。どうしてでしょうか。

ある時、ヤコブが美味しいシチューを作っているところに、ちょうどエサウが狩りから帰ってきました。野原を走り回って来たのでお腹はペコペコです。シチューの美味しそうなにおいに惹かれ、いてもたってもいられなくなり「そのシチューを食べさせてくれ」とヤコブに頼みました。すると、ヤコブは「食べさせるかわりに、兄さんの長子の権利をください」と頼みました。

皆さんならどうしますか。神様の祝福を与えられる大切な長子の権利です。どんなことがあっても渡すはずはないでしょう。でも、エサウは「長子の権利などわたしに何になるう」と言って、その権利を簡単にヤコブに与えてしまったのです。エサウは、長子の権利の大切さをよく知らないばかりか、目先の欲のために大切なものを軽んじたのです。

イエス様を信じる者は、神様の子であり、神様の祝福を受ける者にされています。ですから、エサウのように神様の祝福を失うことがないようにしましょう。

神の祝福を求めたヤコブ

兄のエサウは、「長子の権利」について無関心であり、

大切にしませんでした。でも、弟のヤコブは、「長子の権利」の重みを知っていただけではなく、「何とか長子の権利が自分のものにならないだろうか」と切にその権利を求めているのです。ヤコブは、父親の財産はもちろん、いやそれ以上に神様の祝福を真剣に求めているのです。

まとめ

イエス様を信じているなら、私たちは神の子にされています。そして、父なる神様の祝福を受ける権利が与えられています。でも、神の子としての権利を無視して神に背を向け、目先の楽しいことなどに心を奪われてしまったらどうでしょう。それは、神様を悲しませることになるばかりか、神様の祝福を受けられなくなってしまう。私たちはそうではなく、ヤコブのように神様の祝福をいつも真剣に追い求めて行く者にされましょう。神様は真剣に求める人の思いと祈りに必ず応えてくださいます。「祝福をください！」と願いつつ歩みましょう。

♪けさもわたしの♪(こ4、ホ5、イン48)

聖書 創世記25・19〜34 テーマ 靈的祝福を求めて

序論

(高橋頼男)

創世記の記述はアブラハムと共にヤコブの生涯に焦点を合わせており、25章から50章までがヤコブ物語です。聖書がアブラハムの契約を引き継ぐ者として、いかにヤコブを大切に取り扱っているかがよくわかります。

その誕生について、父イサクは神に祈りました。すべてが神のご計画の中にありましたが、アブラハムと同様、信仰の試みを経験し、その子が与えられるために、父は切に祈り求めました。約束があるからそれでよいのではなく、約束を信じ、その実現のために切に祈り求めることを主は求められるのです。

一、エサウとヤコブ(19〜28)

祈りが聞かれ、リベカの胎の中に子が宿りました。胎の中で二人の子が押し合ったので、母は不安を感じるほどでした。やがて双子の子が与えられるのですが、長子として生まれたエサウは毛深く、荒々しく、野を愛し、長じて巧みな狩猟者となりました。一方、弟ヤコブは、

兄のかかをつかんで生まれましたが、穏やかな性格の中に激しいものを内に持っていました。彼は、天幕の中の生活を愛しました。二人は、性格と生活においてまさに対照的でした。「兄弟というものは、一人の人間が持つ全体的な性質を互いに分けあって生まれてきます」(秋山さと子)と言われます。二人兄弟で、しかも双子であるエサウとヤコブは、その性格や気質を見事に分け合って生まれてきたと言えます。性格そのものに善い悪いはなく、また、どんな性格にも善い面と悪い面があります。この二人については、その性格の違いによって判断されるべきではないでしょう。神の前に彼ら二人を決定的に分けた点は、彼らの霊的な祝福に対する感覚でした。

二、長子の特権を軽んじるエサウ(29〜34)

エサウは、ヤコブが求めるまま、一杯のあつものと長子の特権を簡単に取り替えてしまいました。これはエサウにとってふざけてやったことで、一時のたわごとのやりとりであつたかもしれせん。しかし、目先の一時的なことのみに関心を持ち、目に見えない霊的な永遠に関わることを軽んじるエサウの資質を見る思いです。疲れ飢えていたエサウは、ヤコブが与えたわけありの食物で

腹を満たすと、何事もなかったかのように満足して立ち去りました。彼は自分が何を約束し、何を失ったのかを全く自覚していませんでした。エサウが自分に与えられている霊的な祝福と特権について、いかに無自覚で鈍く、無頓着であつたかということです。

神の選びのご計画の中で、すでに「兄は弟に仕える」(23、ローマ9・10・16)ことが定まっているのなら、なぜエサウのあり方が非難されるのかとの疑問があります。しかし、神の計画であるからと言って人間の責任が問われないということはありません。神の選びのご計画が歴史的にどのように実現していくのか、そこには神の絶妙な摂理の働きがあり、人間に委ねられた責任もその中に含まれているのです。計り難い神のご計画とみわざに対して、恐れをもって、信仰により誠実な応答をすることが求められているのです。

三、霊の祝福を求めるヤコブ (30・31)

ヤコブが兄エサウから長子の特権を奪おうとし、エサウが軽はずみにもそれを承知してしまったこと、また、母リベカとの策略によってそれを実行に移し、老いたイサクを騙して^{だま}ついに長子としての特権を受けたこと

等々、わたしたちは、ヤコブの悪賢いやり方に怒りを感じます。そして、神様がなぜこのようなヤコブのやり方を黙っておられたのか、なぜこのようなヤコブという人間を選ばれたのか、不思議に思います。

しかし反面、これほどまでして尊い神の祝福を自分のものにしたいと熱望したヤコブの並々ならない熱心さに、むしろ教えられる思いがします。イエスさまは「天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」(マタイ11・12)と言われました。果たして、私たちは襲い、奪い取るほどの気迫をもって神の恵みに渴き、その祝福を慕い求めているでしょうか。また、彼の行った様々な悪いやり方に關して、神はその一つ一つに報いられました。彼が身を寄せた他人から、今度はヤコブ自身が苦しめられ、神の懲らしめと取り扱いに身を委ねることとなるのです。その中で、彼は^{へりくだ}謙ることを覚え、悔い改め、変えられていくのです。

結論

クリスチャンとされた私たちが、神から与えられている霊的祝福を自覚し、尊び、さらに豊かな恵みを追求める者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

イスラエル十二部族の祖であるヤコブの生涯がここから始まる。兄が弟に仕えるという神の選びが歴史的にどのように実現していくのかが記されている。ここでは特に長子の特権をめぐる両者の価値観の違いが対照的に描かれている。

テキスト

21 妻が子を産まなかったため アブラハムと同様にイサクも子どもが与えられるまでに時間がかかった(約20年間)。これは彼にとっても、アブラハムとの契約に対する神の真実を信じる信仰が試されることになった。神のご計画のために選ばれた人物が、母親の長い不妊の苦しみの後に生を与えられることがしばしばある。それは彼らが神の特別な器であることが明らかになるためである。

22 押し合った(ヘラーツアツ) 「砕く、粉々にする」という意味でつかわれることも多く、リベカの胎の中での子どもたちの闘争の激しさを表現している。この押し合いは二つの国民が互いに他への優位を占めようとする

争いの始まりである。彼女は行って主に尋ねた胎の中にいる子どもたちが主によって授かったにもかかわらず、異常な状態に不安を感じ、主に尋ね求めた。恐れや不安をそのまま主の前に持ち出して尋ねることは大切である。主はそれに答えられた。

23 兄は弟に仕えるであろう 主に尋ねたリベカに、主のご計画が告げられ、弟であるヤコブが契約の民となることが明らかにされた。それはヤコブのわざによらず、神の選びによるものであることを示している(ローマ9・10(13参照))。リベカはこの告知を忘れることはなかった。

24(26) 双子の誕生の様子は、23節の預言の成就を目に見えて予感させるものであった。赤くて(ヘアドモーニー) これはエサウの髪の毛が皮膚の色かははっきりしないが、明らかにエサウの別名エドム(30)に影響している。毛ごろも(ヘアッデレス・セーアール)のセーアールは「毛深い」の意で、エドムの別名「セイル」と関連する。それで名をエサウと名づけた「エサウ」にも「粗い、毛深い」の意味があり、こちらが名前に使われることになった。それで名をヤコブと名づけた「か

かと」はヘブル語でアーケープ。ここからヤコブと名づけられた。この言葉はエサウによって「おしのける」(27・36)の意味にとられている。

27 エサウは巧みな狩獵者となり…ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた 二人は性格においても、生活においても対照的な存在であった。

28 リベカはヤコブを愛した このことの背後に、出産前に聞いた神のことが関係していたことは十分に考えられる。しかし、偏愛となってしまったのはリベカの限界であった。

30 その赤いものをわたしに食べさせてくれ 「赤いもの」はヘブル語で「アダム」。ここからエサウがエドムと呼ばれることになる。「食べさせてくれ」は「飲みこませて」という意味であり、この時の飢え渇きの激しさが表されている。

31 まず…売りなさい ヤコブは長子の特権を自分のものにすることを常に考えていたので、エサウの一瞬の弱みに付け込んでそれを要求した。長子の特権 長子はすべて神の前に聖別されるべき存在であった(出エジプト13・2)。長子の特権は一般的には、財産の相続において

二倍の分け前を得る権利であるが(申命記21・17)、ここではアブラハムの契約に由来するすべての祝福を意味しており(28・3、4)、霊的なものである。実際、エサウはこの特権を失ったにもかかわらず、物質的には豊かであった(33・9)。

33 まずわたしに誓いなさい ヤコブは長子の特権を確実に自分のものにするために、まずエサウに誓わせた。この誓いにより、長子の特権はエサウから完全に手放された。

34 このようにしてエサウは長子の特権を軽んじた エサウは目先のこと、一時的なことにのみ関心を持ち、目に見えない霊的な、永遠に関わる特権を軽んじた。彼は飲み食いして立ち去ったが、その時に、彼は自分が何を失ったのかを自覚していない。これがエサウの霊的なことに関する鈍さを示している。このことのゆえにエサウは「俗悪な者」(ヘブル12・16)と言われることになった。こうしてエサウのあり方が非難されているように、神の選びだからといって、人間の責任が問われないわけではない。

参考図書 7月26日分と同じ。

牧羊ひろば



神の国キリスト教会 教会学校

●教会について

神の国キリスト教会は今年で創立74年を迎えます。創立以来、岡山駅から北東に1.5kmほどの、岡山市中心部にあります。故長島幸雄牧師の頃から教会学校は活発にもたれていたようです。しかし、筆者が結婚して神の国キリスト教会に転会してきた19年前は、郊外に家を持たれる方が多く、市中心部はドーナツ化現象で、教会周辺は高齢化し、子どもが少なくなるとい状況が続いており、周辺の学校も統廃合していました。教会員の方も同様に郊外に家を持たれる方が多く、日曜日朝の教会学校は開店休業のような日もありました。

しかし、教会から一番近くの小学校が最新設備の建物になったり、生活の便利さからか、都心回帰の動きが見られ、近所にマンションや新築の家がどんどん建ち始め、近所に子どもを多く見かけるようになっていきます。教会

学校教師を長年続けて下さった老姉妹の「若い人々が市中心部に住めるように。子ども連れの家族を呼びもどして下さい。」との祈りに神様は答えて下さったのです。

●日曜日の教会学校

現在、教会学校（日曜日朝9時～10時）には毎週、幼児から中学生まで8名ほどの教会員や近所の子ども達が



普段の教会学校の様子

集っています。司会とメッセージは丸山真理師と筆者夫婦でローテーションしています。

普段の教会学校は小さな礼拝形式から始まります。讃美、主の祈り、祈り、聖書、暗唱聖句、メッセージ、献金、感謝の祈り、讃美歌です。その後牧羊者のワークをします。暗唱聖句では「言える人！」という司会者の声と同時に我先にと活発に手が上がります。また、最後の讃美は教会暦やその日のメッセージに合わせて選ぶこともあります。リクエストの讃美の日もあります。「王様の名前（列王紀）の歌」や「聖書名目づくし」など覚え歌が人気です。

小野淳子師時代に作られたと思われる、「じのないえほんの歌」の大きな字のない絵本が見つかり、教会学校でそれを使って歌ったら、子ども達が夢中になり、こぞって、字のない絵本を自分で作っていたこともありました。これらを使って、礼拝の中で教会学校の子ども達が讃美した時「讃美の内容もとてもよくわかった」と言ってくださった教会員の方がおられました。子どもにわかりやすい歌は、大人にも伝わるのだなと感じました。



紙芝居をしてくださるあがば・さんたち

●みんなで一緒にの礼拝

（イースター、デイキャンプ、クリスマス）
年に3回、礼拝の中でも、子ども達向けのプログラムを準備しています。教会学校が終わると帰ってしまう子ども、教会学校に来られなくて、礼拝には家族と一緒に来ている子どもたちも、一緒に礼拝することができます。



紙芝居の後、お話クイズに答えるこどもたち

また、教会学校の働きを教会の皆さんに知っていたこともできます。プログラムの楽しみの一つは紙芝居です。「あがば」という名前のグループでその日のテーマにあわせて毎回紙芝居をしてくださいました。回を重ねるごとに細工が凝ってきていて、大人も楽しめます。紙芝居の後には必ずお話クイズが5問出て、賞品がもらえるので、子ども達は静かに聞きますし、クイズの時も一番に手を上げようと待ち構えています。



デイキャンプにおける流しそうめんの様子

●イースターのエッグハント
イースターでは玉子型のみことばカードを前日に礼拝堂のイスの見えない部分に貼り付けて隠し、当日エッグハントをします。大人も子どもも参加できます。見つけたら、チョコエッグ（市販品）がもらえます。大当たりのカードが1枚あるのですが、隠すのが上手すぎるのか、このイベントを始めてから、まだ一度も見つかっていません。



デイキャンプでヨーヨーつりをするこどもたち

● デイキャンプの流しそうめんやスイカ割り等

7月の夏休みに入る前後に、デイキャンプを行います。礼拝終了後、教会の駐車場で教会員の方々も一緒に流しそうめんをするのが恒例となっています。そうめんだけでなく、ミニトマト、果物、ゼリー、ソーセージ、おもちの金魚まで流れてくるので、子どもも大人も毎年、

次は何が流れてくるのかとワクワクしています。食べ終わったら、スーパースポーツや水風船、おもちや釣りができます。また、その日礼拝中に聞いた紙芝居のお話に合わせた工作やゲームなどをします。スイカ割りも恒例になっており、古典的とも言えるゲームに、子どもも大人も「右だよ」「あ！ちよつと行き過ぎた」などと声をかけながら、夢中で参加しています。

● クリスマスのミュージックベル、表彰式

ここ数年、教会学校に休まず来る子が増えて、クリスマスのために、ミュージックベルの練習をすることができるようになりました。クリスマスの讃美歌の中から1曲、10月の終わり頃から練習して、クリスマス礼拝の中で演奏しています。昨年で3回目になりました。役割を与えられることがうれしいようで、練習も楽しいようです。最初は階名で讃美歌を歌って覚えます。教会学校の最後10分ほどの少ない練習時間ですがクリスマスには、まとまった演奏になっています。

また、教会学校の出席数に応じて、皆勤賞、精勤賞を丸山牧師より表彰していただきます。この3年間の皆勤

賞のうちの1名は、昔、神の国キリスト教会の教会学校に來られていた方のお子さんで、当教会で蒔かれてきた種の業を見させていただいております。



クリスマス礼拝ではミュージックベルの演奏と賛美をしました

たちでします。小さい子には少しハンディをつけますが、基本的には真剣勝負です。毎年同じかるたを使用していますが、とても盛り上がり、聖書の内容も知ることが出来るので、一石二鳥です。クリスマスに撮った写真と、かるたを取った枚数に応じて、賞品をもらうことができます。



クリスマス礼拝のときの集合写真

●お年玉スペシャル

1月最初の教会学校はお年玉スペシャルです。この日はワークをお休みして、聖書かるたを教会学校の子ども

●今後の課題

「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」Ⅱテモテ4・2

神の国キリスト教会の特別伝道集会、バーベキュー、讚美礼拝とデイキャンプ、バザー、クリスマスなどは教



デイキャンプではお話に関係する工作をした

会外の方に向けて積極的にアピールできる行事です。これらの行事は周辺の方にも知られており、行事前に教会前に出る特看板を見てお子さんを連れて来られる方も多くおられます。これらの行事に来ている子ども達、また、普段教会の周りで見かける子ども達に種を蒔くことができるように願っています。また、今来ている子ども達が今後も教会につながり続けて、しっかりとした信仰生活を歩むことができるよう祈り続けなければいけないと思っております。

（永井谷子）

造り主なる神を知る

創世記 1・1

●ノア・アブラハム

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月5日	ノアの箱舟	創世記 7・1〜24	同 7・1 節
12日	バベルの塔	創世記 11・1〜9	同 11・9 節
19日	アブラハムの旅立ち	創世記 12・1〜9	同 12・1 節
26日	神による約束	創世記 15・1〜16	同 15・6 節
8月2日	イサクの誕生	創世記 21・1〜8 15	同 21・2 節

●キリストの教えと働き

8月9日	罪の赦しの恵み	マタイ 9・1〜8	同 9・2 節
16日	弟子たちの派遣	マタイ 10・1〜16	同 10・16 節
23日	5つのパンと2匹の魚	マタイ 14・13〜21	同 14・20 節
30日	嵐を鎮めたイエス	マタイ 14・22〜33	同 14・27 節
9月6日 デリ	見上げた信仰	マタイ 15・21〜28	同 15・28 節
13日	主の再臨に備える	マタイ 25・1〜13	同 25・13 節
9月20日	イサクの井戸	創世記 26・12〜22	マタイ 5・5 節
27日	霊的祝福を求めて	創世記 25・19〜34	12へ 16 節

●イサク・ヤコブ

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

「子ども聖書日課19」4月2月3日(月)本文3行目と6行目」に間違いがありましたので、お詫びと共に訂正いたします。
「誤」らしい病↓「正」重い皮膚病

おわりに

『牧羊者』二〇二〇年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご芳に感謝いたします。

巻頭言は福岡教会の横田法路師が執筆してくださいました。教師養成講座は宮澤清志師が二〇二〇二一年に執筆くださったものを再掲させていただきました。「牧羊ひろば」は神の国キリスト教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例	松浦みち子師	後藤 真師	和田牧子師
聖書講解	土屋開夫師	飯田勝彦師	櫻井めぐみ師
研究資料	石田高保師	小泉 創師	宮澤清志師
ワーク(A)	高橋頼男師	福井文彦師	
(B)	小平徳行師	辻林和己師	金井由嗣師
(C)	宮澤清志師	加藤 満師	中島啓一師
	吉田美穂師	宇野真佑美師	鎌野 幸師
	山下大喜師	野勢かほる師	勝田幸恵師
	竹崎光則師	八幡直人師	勝田幸恵師
	田中裕明師		
	上森恭子師	三輪正見師	後藤健一師
中高科へのヒント	石田高保師	田中愛子師	金田ゆり師
子ども聖書日課	小野淳子師	柴田福音師	加藤 満師
フラッシュカード	後藤栄子師	丹羽 遥師	
み言葉カード・イラスト	松浦あん姉	柴田福音師	加藤 満師
	後藤栄子師		
	松浦あん姉		
	多田豊子師		
ワープロ打ち込み	後藤健一師	中島啓一師	
校 正			

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松本共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇二〇年度 Ⅱ巻

二〇二〇年七月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三三三一九

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511
電話 (078) 575-5511

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み